

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第21輯

都市計画道路松原泉大津線並びに近畿自動車道和歌山線建設に伴う

平井遺跡

—— 発掘調査報告書 ——

1988

大阪府教育委員会

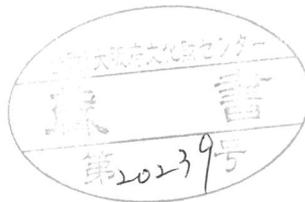
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第21輯

都市計画道路松原泉大津線並びに近畿自動車道和歌山線建設に伴う

平井遺跡

—— 発掘調査報告書 ——



1 9 8 8

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会







序 文

堺市は、大阪市の南部に流れる大和川より南に位置するとともに泉州地方の北部に市域が位置しています。今回調査を実施しました平井遺跡は、堺市街地の南に位置し、近くには泉北ニュータウンが所在します。このニュータウン一帯は5世紀以後の須恵器生産地としての著名な『陶邑』古窯跡が分布しています。

本遺跡は、関西国際空港のアクセス道路の一つなる近畿自動車道と歌山線と府道松原泉大津線が併行して建設される予定であり、出来る限り早期に供用が望まれている路線であります。

調査は昭和61年度から数次にかけて行い、調査の結果、15世紀に生産された瓦器の窯跡が検出されています。この窯跡の発見は全国的に珍しく15世紀頃の土器生産の方法が判る貴重な資料であると認められるものであります。その他には建物跡や溝等の遺構も数多く検出されている。

調査の成果については、本報告書に詳しく記載されていますが、今回の調査結果より古代から中世にかけての人々の生活の跡が辿れることが判り、今後の集落研究に利用されるものと思料されます。

本発掘調査を実施するにあたり、日本道路公団大阪建設局大阪工事事務所、堺市教育委員会、その他地元関係者の皆様と、調査を担当された（財）大阪府埋蔵文化財協会の皆様に、深く感謝いたします。

これからの文化財行政に対するご理解とご援助をお願い申し上げます。

昭和63年3月

大阪府教育委員会

参事兼文化財保護課長 吉房康幸

序 文

平井遺跡は、古墳時代から室町時代にかけての集落跡として周知され、特に陶邑古窯跡群との関連もささやかれていたが、これまで、既往の調査例も少なく、詳細は不明な点が多くありました。

今回の調査の結果については、本報告書に詳しく記述したところでありますが、古墳時代後期の自然流路、平安時代中期後半の集落跡、鎌倉時代の集落跡、室町時代から江戸時代にかけての水田址や、これに関連する水利施設、溜池など各時期の遺構、遺物で構成されていることが明確となりました。とりわけ、鎌倉時代の集落跡やこれに付属して検出された瓦器窯跡から中世集落（13世紀）の様相や瓦器の生産と流通に関する問題解明の糸口がえられた事、また、15～16世紀にかけての一括遺物（土器）の編年試案を作成出来たこと、あるいは、当地域の土地利用形態上の変化が、水利施設や耕作遺構に直接かかわっていたことが明らかとなった事等、多岐にわたって、議論をまきおこす、多大の成果をあげることが出来ました。

本報告書が、泉北地域のみならず、古代史解明の資料として、大いに利用されることを願って止みません。

最後に調査の実施にあたり、種々ご配慮いただきました日本道路公団をはじめとする関係各位に謝意を表すると共に、特に貴重な人材を直接派遣いただいています近畿府県教育委員会、並びに大阪府下市町教育委員会に対し深謝申し上げます。

昭和63年 3月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理 事 長 浅 野 素 雄

例 言

1. 本書は、都市計画道路松原泉大津線、近畿自動車道と歌山線建設工事に先立つ発掘調査のうち、堺市平井に所在する平井遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、大阪府教育委員会および財団法人大阪府埋蔵文化財協会が、日本道路公団および大阪府南部特定事業建設事務所の委託を受けて実施したものである。
3. 発掘調査は、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が担当した。各年度の担当は以下の通りである。

昭和61年度 B、C地区 調査課第6班技師渋谷高秀、小谷正樹、張洋一
A、D地区1、2次調査 調査課第2班技師藤田憲司、趙哲済、蜂屋晴美、第6班宮野淳一、

昭和62年度 A、D地区3次調査 調査課第1班渋谷高秀、岡本敏行、小谷正樹、蜂屋晴美
調整業務 調査課調整係瀬川健
4. 調査はB、C地区が、昭和61年8月から昭和62年3月まで、A、D1、2次調査が昭和61年11月から昭和62年3月まで、A、D3次調査が昭和62年5月から12月まで実施した。整理業務は、発掘調査期間中と昭和63年3月31日までおこなった。
5. 調査にあたっては、堺市教育委員会の奥田豊、石田修、森村健一、北野俊明、樋口吉文、野田芳正、高槻市教育委員会の橋本久和、大阪府教育委員会 広瀬和雄、尾上実、(財)大阪文化財センターの鋤柄俊夫、大東市教育委員会 黒田淳、(財)和歌山県文化財センターの辻林浩、村田弘、佐伯和也、(財)大阪市文化財協会、鈴木秀典の各氏には御指導、御教示を得た。
6. 報告書編集は、渋谷、岡本、小谷がおこなった。文責は、各文末に記した。

本文目次

第1章	調査の経緯と経過	1
第1節	調査に至る経緯	瀬川 1
第2節	調査の目的と方法	渋谷、趙 3
第3節	調査の経過	渋谷、趙 4
第2章	地理的・歴史的環境	9
第1節	地理的環境	趙、藤田 9
第2節	歴史的環境	宮野 14
第3章	平井遺跡の地形と地質	趙 19
第1節	平井付近の地形・地質の概要	19
第2節	平井遺跡の層序	23
1.	平井遺跡の標準層序	24
2.	各地区の沖積層層序	29
3.	各地区のいわゆる地山層層序	40
4.	出土遺物の年代観による分帯	41
5.	地層の対比	43
第4章	遺構	
第1節	概要	渋谷 47
第2節	古墳時代後期	
1.	B・C地区	小谷 47
2.	D地区	趙 48
第3節	平安時代中期	小谷 51
1.	B・C地区	51
第4節	鎌倉時代	61
1.	A西地区	宮野、岡本 61
2.	B地区	小谷 74
3.	C地区	小谷 98
4.	D地区	趙、渋谷 98

第5節	室町時代～江戸時代	109
1.	A東地区	藤田、岡本 109
2.	A西地区	宮野、岡本 118
3.	B地区	小谷 123
4.	C地区	小谷 127
5.	D地区	趙 127
6.	A池地区	渋谷 166
第5章	遺物	167
第1節	概要	渋谷 167
第2節	旧石器～奈良時代	小谷 168
第3節	平安時代中期	渋谷、小谷 172
第4節	平安時代後期～鎌倉時代	180
1.	A西地区	宮野、岡本 181
2.	B地区	小谷 183
3.	D地区	渋谷、小谷 198
第5節	室町時代～江戸時代	225
1.	器種分類	小谷 225
2.	A東地区	藤田、岡本 229
3.	A西地区	宮野 232
4.	B地区	小谷 232
5.	C地区	小谷 234
6.	D地区	小谷、渋谷 237
第6章	まとめ	297
第1節	集落について	渋谷、小谷 297
第2節	B-1028-00瓦器焼成窯について	渋谷、小谷 298
第3節	15、16世紀土器について	小谷 302

挿 図 目 次

第1図	平井遺跡位置図	1
-----	---------	---

第 2 図	調査区の地区割り	3
第 3 図	大阪南部地域埋谷図	11
第 4 図	大阪南部重断面線図	13
第 5 図	明治初期平井周辺の景観	18
第 6 図	周辺遺跡分布図	18
第 7・8 図	平井遺跡とその周辺の地形	20・21
第 9 図	平井付近の地質断面図	22
第 10 図	平井遺跡の標準層序	26
第 11 図	D地区平坦面の呼び名	29
第 12 図	層序断面図 1	31
第 13 図	層序断面図 2	33
第 14 図	A池地区芦池・小池間堤断面図	39
第 15 図	C地区 76-OS 平面、断面図	48
第 16 図	D地区 遺構平面図 1 (古墳時代以前)	49
第 17 図	原池低地地質断面図	50
第 18 図	B地区 1、2-OB 平面、断面図	52
第 19 図	B地区 ピット群 1 平面図	53
第 20 図	C地区全体図	55
第 21 図	C地区 1-OB 平面、断面図	57
第 22 図	C地区 2-OB 平面、断面図	58
第 23 図	C地区 3-OB 平面、断面図	59
第 24 図	B・C地区 土壌、ピット群平面図	60
第 25 図	A西地区 遺構平面図	63
第 26 図	A西地区01-OB 平面、断面図	66
第 27 図	A西地区02-OB、764-OF、396-OW 635-OO、718-OO 平、断面図	67
第 28 図	A西地区 03-OB 平面、断面図	68
第 29 図	A西地区 377-OO 平面、断面図	70
第 30 図	B地区 遺構配置図	75
第 31 図	B地区 3、4、5-OB 平面、断面図	77

第 32 図	B 地区	6、7—OB 平面、断面図	79
第 33 図	B 地区	8、9—OB 平面、断面図	82
第 34 図	B 地区	10—OB 平面、断面図	83
第 35 図	B 地区	11—OB 平面、断面図	85
第 36 図	B 地区	296—OO 遺物出土状況平面、断面図	86
第 37 図	B 地区	229, 296—OO 平面、断面図	87
第 38 図	B 地区	292, 302—OO 遺物出土状況平面、断面図	88
第 39 図	B 地区	瓦器窯1028—OO 平面、断面図(1)	91
第 40 図	B 地区	瓦器窯1028—OO 平面、断面図(2)	92
第 41 図	B 地区	土壌群 平面、断面図	93
第 42 図	B 地区	410—OP、1746、1029、1610—OO 平面、断面図	94
第 43 図	B 地区	291—OS 平面、断面図	96
第 44 図	B、C 地区	溝断面図	97
第 45 図	D 地区	遺構平面図 2 (最終検出状況)	99
第 46 図	D 地区	建物、ピット群 1 平面図	102
第 47 図	D 地区	01、02—OB 平面、断面図	103
第 48 図	D 地区	03—OB, 355—OO 平面図	104
第 49 図	D 地区	ピット群 2 平面図	104
第 50 図	D 地区	108—OS 断面図	105
第 51 図		原池低地 k 層上面平面図	107
第 52 図	A 東地区	遺構全体図	111
第 53 図	A 東地区	06—OS 断面図	113
第 54 図	A 東地区	05—OZ 平面図	115
第 55 図	A 東地区	05—OZ 断面図	116
第 56 図	A 西地区	02—OZ 平面図	119
第 57 図	A 西地区	13—OO 平面、断面図及び 723—OX 断面図	122
第 58 図	B 地区	2109—OO 遺物出土状況	124
第 59 図	B 地区	近世水田址平面図	125
第 60 図	C 地区	280—OS 遺物出土状況平面、断面図	128
第 61 図	C 地区	280—OS 土層断面図	128

第 62 図	D地区	遺構平面図 3 (IV帯; 中世後半)	129
第 63 図	D地区	水利施設平面図(1)	132
第 64 図	D地区	遺構断面図 1	134
第 65 図	D地区	03-O S 断面図	135
第 66 図	D地区	水利施設平面図(2)	136
第 67 図	D地区	遺構断面図 2	137
第 68 図	D地区	水利施設平面図(3)	141
第 69 図	D地区	遺構断面図 3	142
第 70 図	D地区	91-O S 断面図	143
第 71 図	D地区	水利施設平面図(4)	145
第 72 図	D地区	水利施設平面図(5)	148
第 73 図	D地区	遺構断面図 4	149
第 74 図	D地区	水利施設平面図(6)	150
第 75 図	D地区	水利施設平面図(7)	153
第 76 図	D地区	遺構断面図 5	155
第 77 図	D地区	遺構平面、断面図	158
第 78 図	D地区	遺構平面、断面図	159
第 79 図	D地区	遺構平面図 4 (III帯; 江戸時代前半、畑・水田)	163
第 80 図	D地区	遺構平面図 5 (II帯; 江戸時代後半以降)	165
第 81 図	A池地区	トレンチ配置図	166
第 82 図		旧石器遺物実測図	170
第 83 図		石器遺物実測図	171
第 84 図	D地区	m層、1層、C地区76-O S 出土遺物実測図	175
第 85 図	B、C地区	古墳時代出土遺物実測図	176
第 86 図	B地区	366-O P、384、2265-O O C地区 172、173、291-O O 出土遺物実測図	179
第 87 図	D地区	k層出土遺物実測図	205
第 88 図	D地区	j層、250-O O 出土遺物実測図	206
第 89 図	B地区	3-O P、ピット群出土遺物実測図	207
第 90 図	B地区	掘立柱建物出土遺物実測図	208

第 90 図	B 地区	掘立柱建物出土遺物実測図	208
第 91 図	D 地区	01、02-OB、ピット出土遺物実測図	209
第 92 図	A 西地区	OB、OP、OO 出土遺物実測図	210
第 93 図	A 西地区	377-OO 出土遺物実測図	211
第 94 図	B 地区	229-OO 出土遺物実測図	212
第 95 図	B 地区	229、1610、1746-OO 出土遺物実測図	213
第 96 図	B 地区	292-OO 出土遺物実測図	214
第 97 図	B 地区	296-OO 出土遺物実測図	215
第 98 図	B 地区	302、304、1029-OO 出土遺物実測図	216
第 99 図	B 地区	1028-OO 出土遺物実測図	217
第 100 図	B 地区	1028-OO 出土遺物実測図	218
第 101 図	B 地区	291-OS 出土遺物実測図	219
第 102 図	B 地区	291-OS 出土遺物実測図	220
第 103 図	B 地区	291-OS 出土遺物実測図	221
第 104 図	B 地区	127、193、251、367、493、502-OS 出土遺物実測図	222
第 105 図	D 地区	108、354-OS、219-OO 出土遺物実測図	223
第 106 図	D 地区	原池低地 j、k 層出土遺物実測図	224
第 107 図		羽釜器種分類表	225
第 108 図		插鉢器種分類表	227
第 109 図		甕器種分類表(1)	228
第 110 図		甕器種分類表(2)	229
第 111 図	D 地区	176・190-OP・85・91-OS・180-OO・269・272-OX 出土遺物実測図	246
第 112 図	B 地区	2109-OS 出土遺物実測図	247
第 113 図	B 地区	2109-OS 出土遺物実測図	248
第 114 図	B 地区	2109-OS 出土遺物実測図	249
第 115 図	B 地区	2109-OS 出土遺物実測図	250
第 116 図	B 地区	2109-OS 出土遺物実測図	251
第 117 図	B 地区	2109-OS 出土遺物実測図	252
第 118 図	B 地区	2109-OS 出土遺物実測図	253

第 119 図	B 地区	2109-O S 出土遺物実測図	254
第 120 図	C 地区	280-O S 第 4 層出土遺物実測図	255
第 121 図	C 地区	280-O S 第 5 層出土遺物実測図	256
第 122 図	C 地区	280-O S 第 5, 6 層出土遺物実測図	257
第 123 図	C 地区	280-O S 第 5 層出土遺物実測図	258
第 124 図	C 地区	280-O S 第 5 層出土遺物実測図	259
第 125 図	C 地区	49-O S 出土遺物実測図	260
第 126 図	C 地区	49-O S 出土遺物実測図	261
第 127 図	C 地区	49-O S 出土遺物実測図	262
第 128 図	C 地区	49-O S 出土遺物実測図	263
第 129 図	C 地区	49-O S 出土遺物実測図	264
第 130 図	C 地区	49-O S 出土遺物実測図	265
第 131 図	D 地区	88、352-O O 出土遺物実測図	266
第 132 図	D 地区	278-O X 出土遺物実測図	267
第 133 図	D 地区	127-O S 出土遺物実測図	268
第 134 図	D 地区	127-O S 出土遺物実測図	269
第 135 図	D 地区	249-O S 出土遺物実測図	270
第 136 図	D 地区	148-O S、249-O X 出土遺物実測図	271
第 137 図	D 地区	351-O S 出土遺物実測図	272
第 138 図	D 地区	351-O S、355-O O 出土遺物実測図	273
第 139 図	D 地区	263-O W、298-O X、01-O X 出土遺物実測図	274
第 140 図	D 地区	100-O X 出土遺物実測図	275
第 141 図	D 地区	100-O X 出土遺物実測図	276
第 142 図	D 地区	100-O X 出土遺物実測図	277
第 143 図	D 地区	02B-O X 出土遺物実測図	278
第 144 図	D 地区	02B-O X 出土遺物実測図	279
第 145 図	D 地区	02B-O X 出土遺物実測図	280
第 146 図	D 地区	02B-O X 出土遺物実測図	281
第 147 図	D 地区	02B-O X 出土遺物実測図	282
第 148 図	D 地区	02B-O X 出土遺物実測図	283

第 149 図	D地区 02B-O X 出土遺物実測図	284
第 150 図	D地区 02B-O X 出土遺物実測図	285
第 151 図	D地区 02B-O X 出土遺物実測図	286
第 152 図	D地区 02B-O X 出土遺物実測図	287
第 153 図	D地区 02B-O X 出土遺物実測図	288
第 154 図	D地区 02B-O X 出土遺物実測図	289
第 155 図	D地区 02B-O X 出土遺物実測図	290
第 156 図	A西地区 13-O O、172-O X、 D地区 112A-O O 出土遺物実測図	291
第 157 図	A東地区 06-O S 出土遺物実測図(1)	292
第 158 図	A東地区 06-O S 出土遺物実測図(2)	293
第 159 図	A東地区 06-O S、D地区 117A-O X 出土遺物実測図	294
第 160 図	A東地区溝・土壙・井戸 (393~397)、 畑・土壙 (398~404) 出土遺物実測図	295
第 161 図	集落配置図	298
第 162 図	15・16世紀土器編年表	307

表 目 次

第 1 表	層序対比表	45
第 2 表	D地区水利施設等の対比試案	160
第 3 表	平井遺跡発掘調査総括表	299

図 版 目 次

巻頭図版 1	B地区瓦器窯	図版 3	遺跡 A東地区05-O Z
巻頭図版 2	D地区02B-O X 遺物出土状況	図版 4	遺跡 A東地区02-O W
図版 1	平井遺跡航空写真	図版 5	遺跡 A東地区土層断面図
図版 2	遺跡 A東地区全景	図版 6	遺跡 A東地区 堤
		図版 7	遺跡 A地区全景

- | | | | | | |
|------|----|-------------------------------|------|----|-------------------------|
| 図版8 | 遺跡 | A西地区全景ピット群1 | 図版32 | 遺跡 | B地区1028-〇〇 |
| 図版9 | 遺跡 | A西地区377-〇〇 | 図版33 | 遺跡 | B地区1027-〇S |
| 図版10 | 遺跡 | A西地区377-〇〇 | 図版34 | 遺跡 | B地区1027-〇S |
| 図版11 | 遺跡 | A西地区33、284-〇S | 図版35 | 遺跡 | B地区2052-〇S |
| 図版12 | 遺跡 | A西地区347、754、755
-〇S、188-〇S | 図版36 | 遺跡 | B地区2263、2300-〇〇 |
| 図版13 | 遺跡 | A西地区南東遺構
71-〇B | 図版37 | 遺跡 | B地区近世水田址 |
| 図版14 | 遺跡 | A西地区02-〇Z | 図版38 | 遺跡 | B地区近世水田址 |
| 図版15 | 遺跡 | B地区全景 | 図版39 | 遺跡 | C区全景 |
| 図版16 | 遺跡 | B地区土層断面 | 図版40 | 遺跡 | C地区76-〇S |
| 図版17 | 遺跡 | B地区76-〇S | 図版41 | 遺跡 | C地区谷状地形173-〇〇 |
| 図版18 | 遺跡 | B地区1、2、3、
6-〇B | 図版42 | 遺跡 | C地区1、2-〇B |
| 図版19 | 遺跡 | B地区6、7-〇B
ピット群 | 図版43 | 遺跡 | C地区3-〇B柱穴群 |
| 図版20 | 遺跡 | B地区9、10-〇B | 図版44 | 遺跡 | C地区47、85-〇S |
| 図版21 | 遺跡 | B地区410、1510、366
-〇P遺物出土状況 | 図版45 | 遺跡 | C地区1-〇S |
| 図版22 | 遺跡 | B地区291、229、296-〇〇 | 図版46 | 遺跡 | C地区1-〇S |
| 図版23 | 遺跡 | B地区291-〇S
遺物出土状況 | 図版47 | 遺跡 | C地区7-〇〇 |
| 図版24 | 遺跡 | B地区296-〇〇 | 図版48 | 遺跡 | C地区48-〇〇 |
| 図版25 | 遺跡 | B地区256、296、292-〇〇 | 図版49 | 遺跡 | C地区近世水田址 |
| 図版26 | 遺跡 | B地区292、302-〇〇 | 図版50 | 遺跡 | D地区全景 |
| 図版27 | 遺跡 | B地区1028、1029-〇〇 | 図版51 | 遺跡 | D地区全景 |
| 図版28 | 遺跡 | B地区1028-〇〇 | 図版52 | 遺跡 | D地区原池低地 |
| 図版29 | 遺跡 | B地区1028-〇〇 | 図版53 | 遺跡 | D地区原池低地地層断面 |
| 図版30 | 遺物 | B地区1028-〇〇 | 図版54 | 遺跡 | D地区84A-〇S
k層上面検出状況 |
| 図版31 | 遺跡 | B地区1028-〇〇 | 図版55 | 遺跡 | D地区101、102-〇B・
ピット群1 |
| | | | 図版56 | 遺跡 | D地区02-〇B柱穴断面 |
| | | | 図版57 | 遺跡 | D地区100-〇X |
| | | | 図版58 | 遺跡 | D地区03、351-〇S |
| | | | 図版59 | 遺跡 | D地区03-〇S検出状況 |

- | | | | | | |
|------|----|---|-------|----|------------------------|
| 図版60 | 遺跡 | D地区02B-OX | 図版78 | 遺物 | A西地区125、126 |
| 図版61 | 遺跡 | D地区85-O S、355-O O | 図版79 | 遺物 | A西地区377-O O |
| 図版62 | 遺跡 | D地区水利施設 | 図版80 | 遺物 | B地区229-O O |
| 図版63 | 遺跡 | D地区127-O S等 | 図版81 | 遺物 | B地区229-O O |
| 図版64 | 遺跡 | D地区82-O X、04、
11-O O | 図版82 | 遺物 | B地区296-O O |
| 図版65 | 遺跡 | D地区348、349-O X | 図版83 | 遺物 | B地区292、302、304-O O |
| 図版66 | 遺跡 | D地区112A-O O、
02A-O X | 図版84 | 遺物 | B地区1028-O O |
| 図版67 | 遺跡 | D地区117A-O X | 図版85 | 遺物 | B地区1028-O O |
| 図版68 | 遺跡 | D地区231-O O、
112B-O W | 図版86 | 遺物 | B地区1028-O O |
| 図版69 | 遺物 | A~C地区 石器 | 図版87 | 遺物 | B地区291-O S |
| 図版70 | 遺物 | A~C地区 石器 | 図版88 | 遺物 | B地区291-O S |
| 図版71 | 遺物 | D地区m層 | 図版89 | 遺物 | D地区108、285-O S |
| 図版72 | 遺物 | D地区k/l層
古墳時代包含層 | 図版90 | 遺物 | B地区2109-O S |
| 図版73 | 遺物 | C地区172、173-O O | 図版91 | 遺物 | B地区2109-O S |
| 図版74 | 遺物 | D地区 k層 | 図版92 | 遺物 | C地区280-O S
5、6層 |
| 図版75 | 遺物 | D地区 j層 | 図版93 | 遺物 | C地区49-O S |
| 図版76 | 遺物 | B地区156、170、212、226、
410、1708-O O | 図版94 | 遺物 | D地区127-O S、
351-O S |
| 図版77 | 遺物 | A西地区277、377、397-O O、
B地区1029-O O
D地区129、250-O X | 図版95 | 遺物 | D地区100-O X |
| | | | 図版96 | 遺物 | D地区02B-O X |
| | | | 図版97 | 遺物 | D地区02B-O X |
| | | | 図版98 | 遺物 | D地区02B-O X |
| | | | 図版99 | 遺物 | D地区02B-O X |
| | | | 図版100 | 遺物 | D地区02B-O X |

第1章 調査に至る経緯と経過

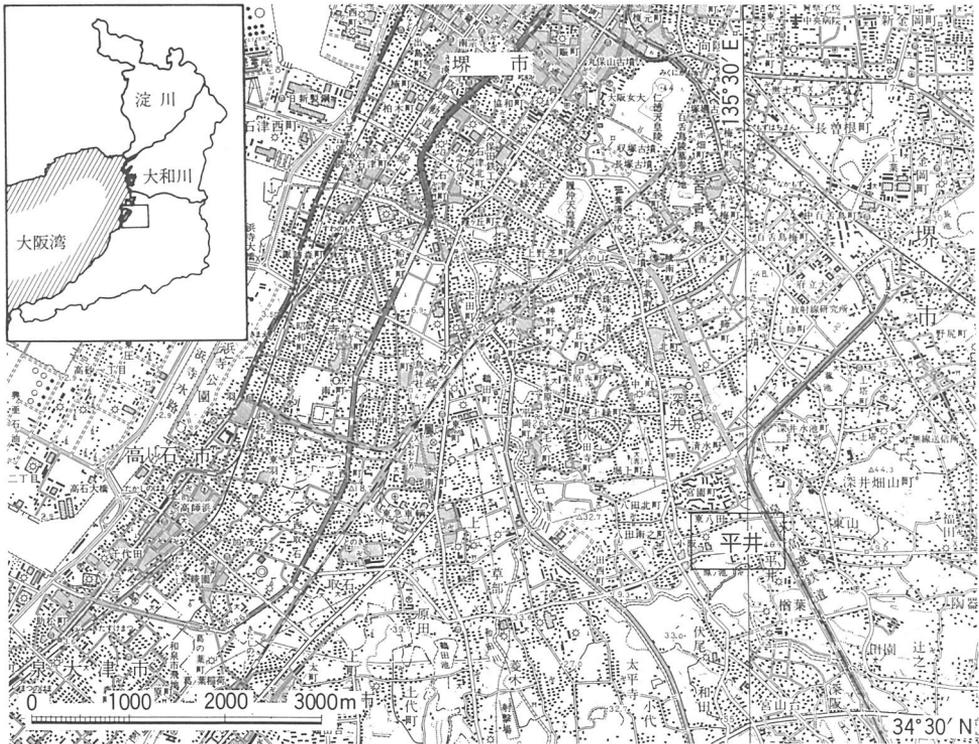
第1節 調査に至る経緯

堺市平井に所在する平井遺跡は石津川支流陶器川右岸の中位段丘上に位置する。

本遺跡は、1985年に大阪府教育委員会と(財)大阪文化財センターが実施した試掘調査によって発見され、古墳時代から室町時代にかけての集落址として周知されるに至った。

本遺跡周辺の発掘調査は主として堺市教育委員会によって実施されてきた。遺跡内の堺市立久世小学校の新築工事に伴う調査や、隣接する小阪遺跡内での長崎屋建設に伴う調査では中世から近世にかけての遺構・遺物が検出されている。また、原池の西側の関西電力発電所建設に伴う調査では、畿内V様式～庄内期の遺構・遺物が検出されている。

今回の発掘調査は、近畿自動車道和歌山線並びに都市計画道路松原泉大津線建設に伴う調査である。この建設工事に関連する発掘調査としては、石津川以西の西浦橋遺跡や太平



第1図 平井遺跡位置図（枠内は第2図の範囲）

寺遺跡など、堺市小阪付近で近畿自動車道と分離後西に向う松原泉大津線にかかる遺跡ではすでに終了しており（大阪文化財センター，1984）、また、石津川以東の小阪遺跡では調査が進行中であった。

本調査の開始に先立って、日本道路公団大阪建設局・大阪府土木部と大阪府教育委員会並びに大阪府埋蔵文化財協会とが協議し、当該建設工事に伴う、南河内郡美原町域以南での従来の調査と同様に、まず高速道路の両側に設けられる府道部分の調査から実施することとなった。調査はつぎの順序による。

府道部分の調査は、まず両側5m幅で行い（1次調査）、遺構の有無を確認したうえで全道路幅（片側約15m）に拡張する（2次調査）。

中央の約30mの幅を占める近畿自動車道部分（3次調査）は、橋脚をもつ高架構造であるが、2次調査によって遺構の存在がほとんど考えられない部分を除いては、橋脚部分以外も調査の対象とする。そして、府道部・近畿自動車道部のそれぞれの最終遺構面は、重要な遺構については事業者との協議を行い、極力保存の方向を探る。

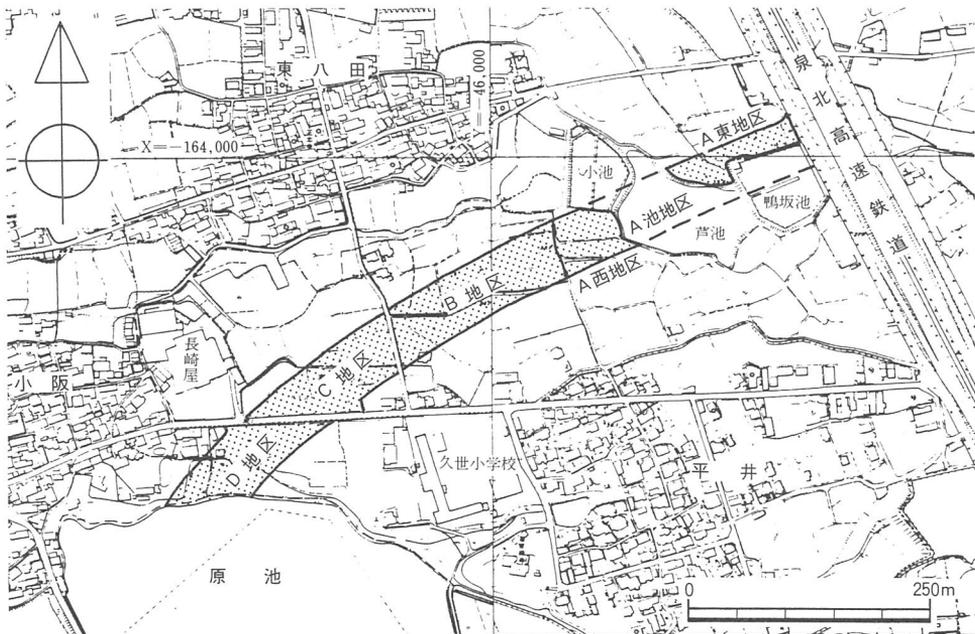
以上の調査方法が、各関係者間の協議の結果、近畿自動車道と歌山線と都市計画松原泉大津線との並行区間にかかる各遺跡で採られたものである。

調査の開始にあたっては、地元と道路事業者との間で行われていた道路構造に関する協議を待ち、その調整がついた1987年9月から調査を開始した。（瀬川）

第2節 調査の目的と方法

本調査区は、泉北1号線（泉北高速鉄道）を東限とし、西は、原池北岸までの東西約750m、幅60mの区間であり、平井遺跡中央部をほぼ東西に横切っている。調査区名称は、地形条件や工事発注等の関係で、東から、A東、A池、A西、B、C、Dの各地区を設定した。（第2図）

この地域の遺跡の様相は、前述した様に、いくつかの既往の調査例があるが、詳細は、不明な点が多く、漠然と古墳時代から中世にかけての遺跡である事しかわかっていなかった。したがって発掘当初には、平井遺跡の全体像を把握する事に目的がおかれた。それ故調査が先行したB、C地区では、1次調査において、トレンチ調査による地層（土層）の観察を徹底して実施した。その結果、調査区の大部分の遺物包含層が、近世以降の耕作土層の累積によって構成されている事、中世の遺構は、いわゆる地山上面で検出される事、中世以前の遺構は、主には、古墳時代後期のもので、後世の削平をまぬがれ、わずかに残存する古地形凹部に認められる事等が判明した。1、2次調査過程では、新たに次の可能性が指摘された。ひとつは、13世紀前半段階の集落跡や瓦器窯の検出によって泉州における中世集落の様相や瓦器の生産と流通に関する問題解明の糸口がえられた事、他は当地域の



第2図 調査区の地区割り

土地利用形態上の変化が、層位学的基礎に立脚して検討できる見通しを得られた事である。

したがって平井遺跡の全容を解明するという大前提にたった上で、本調査では、特に中世遺構、遺物の調査研究に主眼をおき、また土地利用形態の変化に直接かかわる水利施設や耕作遺構の詳細な調査、記録保存を目的とした。とはいえ、これらの目的に対して特別の方法があるわけではなく、本来の考古学の発掘方法にのっとって実施したことは改めて言うまでもない。

各調査地区における地区割りは、基本的には、大阪府埋蔵文化財協会（1987）が述べたように、座標系は建設省規定の第Ⅵ座標系を用い、大阪府土木局発行の2500分の1地域計画図（地形図）の地域割に従って区分した。この区分によれば、当調査地は、大E-5-9・10にあたる。また各地区は、100m四方に分け、さらにそれぞれアルファベットを付して、区画名とし、遺構・遺物の記録に用いた。区画名は、原則として第Ⅵ座標系のみを用いることとする。T.P.は標高の略号である。

遺構の表記については、本協会で定めた略号をもちいている。

建物	OB	柵、塀	OF	溝	OS
池、沼	OL	土壌	OO	その他不明	OX
ピット	OP	河川	OR		
井戸	OW	田、畑	OZ		(渋谷)

第3節 調査の経過

1. B・C各地区

B地区は、本調査地のほぼ中央、久世農協の北側に位置し、東西約187m、幅60m調査面積約10900m²である。里道をはさんで、東はA西地区に、西はC地区に接する。

C地区は、長崎屋の東側、道路建設予定地をさす。東西約122m、幅60m調査面積約5500m²である。南側の主要地方道泉大津・美原線をはさんで、D地区に接する。

B、C地区は、準備工が終了した1986年9月下旬より、第1次調査を実施した。調査区両側、幅5mを、現代耕土と床土を機械掘削した後、調査区両側に、地層確認のためのトレンチを設定し、断面観察をおこなったところ、地山上面に13世紀前半の遺物を含む柱穴や土壌など多数検出され、また水田耕土と考えられる地層が複数面認められたので、9月29日、大阪府教育委員会が現地立会を行ない、第2次調査の実施が決定された。

第2次調査は、府道部分の片側17mを両側において全面調査するもので、10月初めより

本格的な調査に入り、10月後半には、B、C地区ともに基本層序が確立し、遺構の分布が把握できた。1、2次調査より推定できる埋蔵文化財の状況は以下の通りである。

B地区は、地山上面に12～13世紀の遺物を埋土に含む柱穴や土壇が、数ヶ所密集して分布するため、鎌倉時代を中心とする集落跡が大規模に検出される可能性が考えられた。また、上位の遺物包含層中には、中～近世と考えられる水田址遺構が、2～3面分布する事が明らかとなった。

以上の状況から、B地区1、2次調査区では、設計書や調査期間等をも考慮して、次のように調査方針を立てた。

まず、地山上面は、全面を精査する。また、連続的に形成されている水田址については古い方から2面を全面調査し、最上位の1面については、4m四方の調査区を全域に数ヶ所設定し、一筆の広さやすき溝の方向など記録保存する。

C地区については、古墳時代後期の自然流路やその上に堆積する平安時代中期、10世紀後半の谷状の落ち込み、15～16世紀の遺物を含む溝、また中～近世にかけての水田址などが検出された。C地区は、調査面積がB地区に比べて狭く、土量も少ないため、識別された地層ごとに順次発掘調査を行う事とした。

以上の方針にそって調査を実施し、最終遺構面で、B、C地区各2回の航空測量をおこなった。また、B地区で発見された瓦器窯については、他に類例をみない重要な遺構との判断から、保存協議が関係機関で行なわれた。その結果、大阪府教育委員会の指導により、現地保存することになり、現寸大の複製模型を作成した。1986年12月21日には、瓦器窯をはじめとして遺跡の状況を広く一般市民に伝えるために現地説明会を実施し、翌年1987年1月に1、2次調査区全域を砂で埋戻し、遺構保存した。

B、C地区の3次調査（近畿自動車道部分）は、1、2次調査結果を受けて、大阪府教育委員会の指導により、B地区は全域を発掘調査対象とし、主要な13世紀前半の集落跡の確認に主眼を置いた。またC地区は、遺構の関連から、東、西端と中央部の一部を全面発掘調査対象区とし、中央部は、当初設計どおりに橋脚部のみを順次調査した。

3月には、B、C地区合わせて、3回の航空測量を実施した。B地区では、橋脚予定地に掘立柱建物が検出されたため、再び保存協議が行なわれ、一部の橋脚位置を移動させることになった。これに伴って破壊されることが決定した橋脚部に対しては、旧石器包含層の確認を目的としてトレンチ調査を実施した。他の橋脚間については砂埋戻しによる遺構保存を行い、3月25日、全調査工程を終了した。（渋谷）

2. A東、A西、D地区（1、2次調査）

A東区は、鴨坂池、芦池の北岸の府道建設予定地をさす。東西130m、幅17mで、調査面積約2200㎡である。

A西区は、芦池、小池の西、南岸の府道建設予定地をさす。里道をはさんで、B地区に接する。東西54m前後、調査面積約1840㎡である。

D地区は、主要地方道泉大津美原線と原池とに挟まれた地区であり、全長約90m、調査面積約2400㎡である。

これら調査区の1次調査は、B、C地区より遅れて1986年12月中旬から順次開始した。調査に先立って、A東地区の芦池沿いとD地区の原池沿いは、調査深度が深くなり、溜池側からの水圧の影響が懸念されたため、事前に鋼矢板を打設した。1次調査開始の重機掘削から2次調査開始までの経過は、B、C地区と同様である。大阪府教育委員会の現地立会は、D地区が12月26日、A東、西地区が翌1987年1月17日にそれぞれ実施され、2次調査へと移行した。

A東、西地区は、鴨坂池、芦池、小池に接しているため、溜池の形成にかかわる情報が得られることが期待された。調査の結果、畑、水田等が中、近世以降、区画を変えながら現代まで累重するようすが明らかとなった。また、A西地区では、中世掘立柱建物が検出され、当地区にも中世の住居址が広がることが明らかとなった。

一方、D地区においても、13世紀前後の中世掘立柱建物が検出された。また、15～16世紀の遺物を含み、近世に埋積されたと考えられる井戸、淵等の小規模水利施設が多数検出された。

また、原池寄りの地区では、少なくとも弥生時代以降現代に至る遺物が累積する地層ごとに包含されていることが明らかとなり、平井遺跡の変遷を考察するうえで、重要な情報が提供できるものと考えられた。しかし、前述した鋼矢板の強度を越えて調査深度が深くなるため、弥生時代以前と考えられる地層についてはトレンチ調査にとどめ、調査の主体は、3次調査に譲ることになった。

A東、西、D地区は、調査の進行状況に応じて、2月から3月にかけて4回の航空測量を実施した。また検出された遺構のうち、大阪府教育委員会の指導により、中世平井遺跡を物語る重要な遺構と判断されたものに対して砂で埋戻し、現地保存した。なお、これらの地区は、調査の開始が当初計画よりかなり遅れたため、3次調査は、次年度調査事業として実施する旨、変更が決定された。（趙）

3. A東、A西、D地区（第3次調査）

1、2次調査の成果を受けて、1987年5月より、A東、A西、D各地区の日本道路公団建設予定地を対象とした第3次調査を実施した。調査は、府教委の指導により、A東地区については、橋脚部分を、A西、D各地区については、全面発掘調査をおこなった。A東地区は、面積約570㎡、A西地区は面積約1300㎡、D地区は、約3140㎡である。A東、A西、D各地区共に、溜池に近接する地点は、安全性確保のため、鋼矢板の打設を実施し、調査した。調査は、1、2次調査成果を受けて、各遺構面の追求を実施した。航空測量は調査期間中4回、各最終面で実施した。遺構保存は、大阪府教育委員会の指導を受け、D地区の中世掘立柱建物跡を砂埋戻しをおこない、1987年11月に調査を終了した。

4. A池地区

A東地区とA西地区間に位置する鴨坂池、芦池、小池など溜池部分を対象とした調査は1987年11月より実施した。平井遺跡内に所在する溜池は、平井周辺地域の大規模な開発を表現する。平井遺跡の段丘上の開発時期とその展開過程の情報を得る作業は、発掘調査においても主要な目的の一つであった。溜池部分の発掘調査は、これら問題との関連の上から重要であるとの認識故に、鴨坂池と芦池間、芦池と小池間の堤の調査に主眼をおき、溜池の築造開始時期や改修時期の把握につとめた。また、各池内部にもトレンチを設定し、溜池築造以前の地形復元や遺構、包含層の有無確認を実施した。調査の結果、当初の調査目的は明確となり、1987年12月、大阪府教育委員会の立合を受け、調査を終了した。

5. A西、B、C地区立合調査

1987年12月、A西、B、C各地区の両側、約1mの擁壁部分の立合調査を実施した。各調査地区共に、現代耕土、床土を機械掘削、それ以下は、人力掘削をおこない、擁壁工事の深さに最終遺構面が達しない場合は、その上面で止めた。100分の1遺構平面図、写真撮影をおこない、12月平井遺跡全調査を終了した。 (渋谷)

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

1. 大阪平野南部の地形・地質の概要

大阪平野の南部は、北から生駒山地、金剛山地へと続き、西に折れて和泉山脈へと連なる急峻な山地に囲まれた、丘陵、段丘、平野からなる（第3・4図）。

和歌山県との境にある和泉山脈は、三国山（標高885.7m）や葛城山（865.7m）などの頂部を連ねる主峰部と、その前衛に広がる山地からなる。

和泉山脈の主峰部は、中世代白亜紀の和泉層群が形成している。一方、前衛山地は主峰部より古いジュラ紀～白亜紀に活動した領家花崗岩類や泉南流紋岩類などからなり、200～400m前後の頂部には、平坦な削剥面が認められていて、善正面と呼ばれている。

主峰部と前衛山地の間や、前衛山地前面には、主梁線方向と平行する窪地帯が分布する。

奈良県との境を区切る生駒山地や金剛山地も、この時期に活動した領家花崗岩類や斑レイ岩体からなっている。

金剛山地の北端には、第三紀中新世に活動した火山岩類からなる二上山がある。二上山は旧石器時代以来のサヌカイト石材の産地として知られているが、和泉山地の前衛部にも同時期の火山岩類が点在している。嶽山火山岩や鍋山安山岩、奥水間の安山岩岩脈などはサヌカイトに類似した黒色緻密な安山岩である。

これらの基盤山地の前面には、大阪層群からなる丘陵が広く分布している。大阪層群は新第三紀鮮新世から第四紀更新世中期にかけて堆積した河成～湖成層であり、12層の海成層（Ma-1～10層）を挟んでいる。丘陵は標高約200mから数10mであり、起伏のある地形面をつくっている。

丘陵の前縁部には、更新世中期の高位段丘堆積層が分布し、高位のものと低位のものがあるといわれている。この地層は平野部地下のMa11海成粘土層の層準に対比されている。

丘陵には基盤山地に源を発する河川が、南東－北西方向、あるいは南－北方向に下刻し、幅広い谷地形を形成している。河川方向は、基盤の地塊運動の影響を受けていると考えられている。

丘陵を下刻する谷部や、丘陵前縁部前面には、中位・低位段丘群が分布する。

中位段丘を構成する中位段丘堆積層は、典型的には海成層（Ma12層）を挟む河成～扇状地性の地層である。この地層は、主として更新世中期末のリス／ウルム間氷期に形成されたと考えられている。上町台地を構成する上町層や、明石人骨の産出層と推定されている西八木層は、この層準の地層である。中位段丘面や泉北台地の高位段丘面の一部は、浅い谷が刻まれてはいるものの、比較的ならだかな地形面を残している。

低位段丘堆積層は、現河川沿いに発達する河岸～扇状地性の段丘地形をつくっている。河床との比高は10m以下である。

近畿地方中部地域において、低位段丘堆積層の上部層準には、2層の火山灰層が挟まれていて、平安神宮火山灰層・鬼虎川火山灰層（吉川ほか、1986⁽¹⁾）と呼ばれている。

沖積平野（低地）の分布は、大阪平野南部においてはごく狭い範囲に限られていて、現河川沿いと沿岸部にみられるにすぎない。沿岸部には砂洲や浜堤が分布している。典型的な沖積平野は河内平野や西大阪平野であり、難波累層と呼ばれる沖積層からなっている。

典型的な沖積層は中位にMa13海成粘土層を挟んでいる。Ma13層は縄文海進期の地層である。上町台地の西縁や貝塚市西方には沖積地に面して段丘崖が長く延びている。これらは縄文海進最高潮位期の波食崖と考えられている。

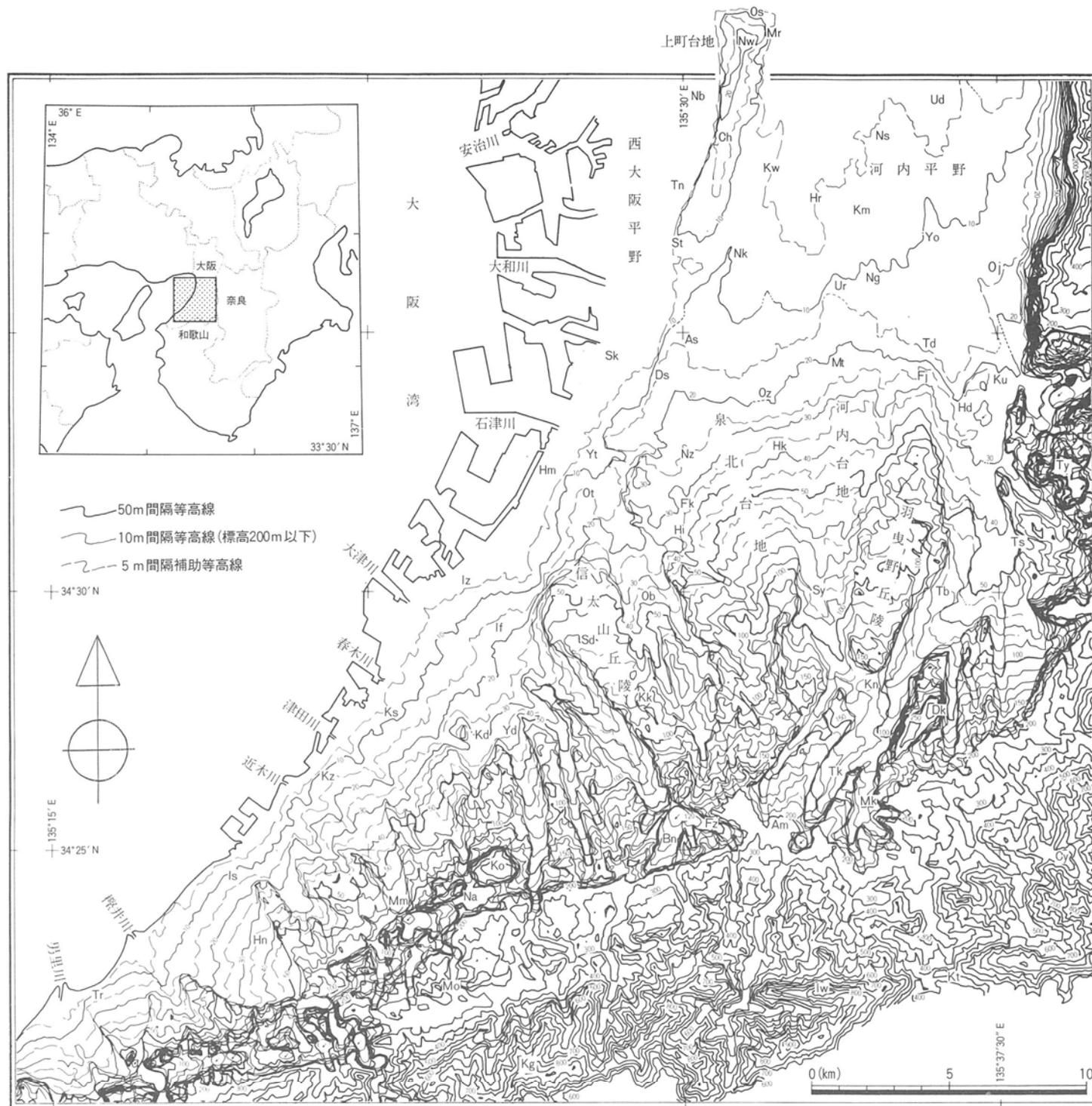
2. 大阪平野南部の遺跡の立地概要

大阪平野南部に分布する遺跡は、その大半が高位段丘面以下の段丘面と沖積低地に立地し、基盤山地や丘陵上ではあまり知られていない。

その中であって、二上山周辺の旧石器時代の遺跡、須恵器生産の一大拠点となった泉北台地、中世～戦国末期の千早城址や井山城址（阪南町）、近世の和泉砂岩採取場であったミノバ石切場遺跡（阪南町）等は、基盤山地や丘陵上に位置し、その地質条件や地理的条件に根ざした原材料供給地、生産地として、あるいは防御・戦闘を目的とした遺跡が営まれたところである。やや様子の異なるものとして、弥生時代中～後期の山上の集落遺跡も和泉市観音寺山、泉南市滑瀬で知られている。比高30～40mを越す山上の集落遺跡は泉州にはまだ類例が少ないが、滑瀬遺跡の調査からみれば、今後泉南地方でこの種の遺跡の例がさらに追加されることは容易に推測される。

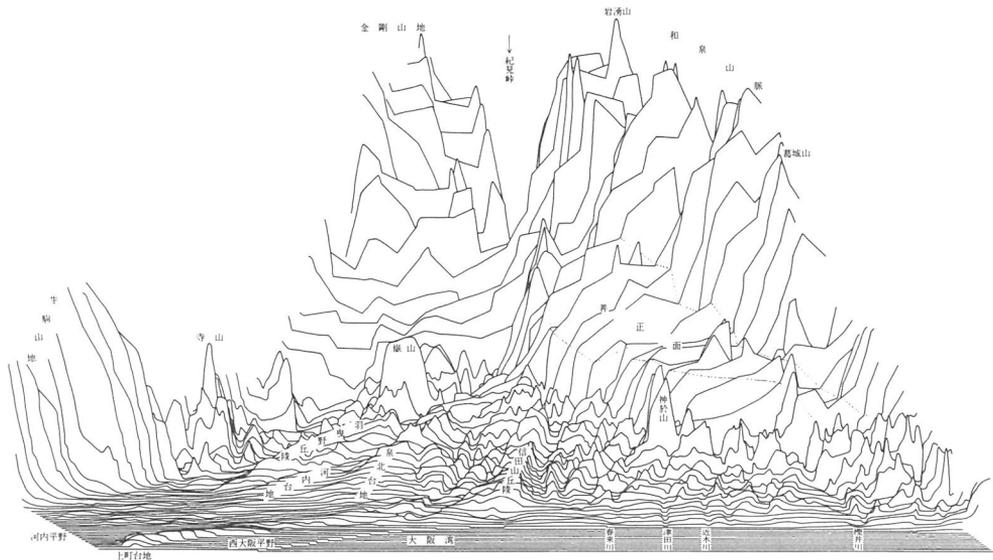
高位段丘面、その中でも特にその低位に位置する地域や、中位・低位段丘面には多くの遺跡が立地する。中世以降の水田開発に関わるものを除いても、旧石器時代以来の遺跡が累重する例は多い。

例えば、石川河岸の低位段丘に立地する国府遺跡（藤井寺市）は旧石器時代～弥生時代



- As 浅香山、Am 天野山、
- Bn 仏並、
- Ch 天王寺茶臼山、Cy 千早、
- Dk 嶽山、Ds 大仙古墳、
- Fj 藤井寺、Fk 深井、Fz 福瀬、
- Hd 菅田山古墳、Hi 平井、Hk 日置荘、Hm 浜寺、Hn 日根野、Hr 平野、
- If 和泉府中、Is 泉佐野、Iw 岩湧山、Iz 泉大津、
- Kd 久米田池、Kg 葛城山、Kk 光明池、Km 加美、Kn 河内長野、Ko 神於山、
- Ks 岸和田、Kt 紀見峠、Ku 国府、Kw 桑津、Kz 貝塚、
- Mk 三日市、Mm 水間、Mo 奥水間温泉、Mr 森の宮、Mt 松原、
- Na 鍋山、Nb 難波、Ng 長原、Nk 長居公園、Ns 長瀬、Nw 難波宮跡、Nz にさんざい古墳、
- Ob 大庭寺、Oj 恩智、Os 大阪城、Ot 鳳、Oz 大泉緑地・南花田、
- Sd 信太山、Sk 堺、St 住吉大社、Sy 狭山池、
- Tb 富田林、Td 津堂城山古墳、Tk 高向、Tn 天下茶屋、Tr 樽井、Ts 太子、Ty 寺山、
- Ud 瓜生堂、
- Yd 山直北・山之内、Yo 八尾、Yt 四ッ池

第3図 大阪南部地域埋谷図（国土地理院発行25000分の1地形図を基に、幅200m以内の谷を埋めて作成）



第4図 大阪南部重断面線図

(大阪湾から南東方向へ和泉山脈を望む。断面線間隔は500m、水平縮尺：40万分の1、垂直：水平比は25：1、断面線の垂直ブラシは4m、標高200m以下は200m埋谷面図、標高200m以上は2km埋谷にもとづく)

の遺跡である。泉北台地に立地する南花田遺跡（堺市）は旧石器・縄文・古墳時代の遺跡である。牛滝川沿いの中位段丘に立地する山ノ内・山直北・三田・二俣池北等の遺跡群には、旧石器時代～奈良時代の遺跡が重なり、あるいは隣接している。このような例は安定した立地条件を恒常的に備えていたことの証である。遺跡は累重するという経験則の具体例といえよう。

沖積低地においても、石津川沿いの四ツ池遺跡や大庭寺遺跡では、縄文時代～古墳・奈良・鎌倉時代の遺構が累重する。

沿岸部の沖積平野に立地する貝塚市脇浜遺跡では、縄文海進期に波食崖が形成されて後、砂洲が海側に順次形成され、陸地が拡大している。一方で、旧石器時代の指標層準となる低位段丘構成層や沖積層下部層準は、おそらく波食によって削剝され、残っていない。

大阪南部の起伏のある地形は、遺跡間の交流や遺物の流通にも深くかかわっている。丘陵を深く刻んで流れる主要河川沿いの中位・低位段丘と、丘陵前面の地域は流通の経路でもあった。古墳時代に須恵器陶工集団は石津川を遡り、出来上った製品を携えて川を下っていることは疑いない。

大津川沿いの諸遺跡は、弥生時代前期に海岸に近い沖積地や中位段丘上に立地し、中期後期へとしだいに内陸部へ拡大したと考えられる（石神，1988⁽²⁾）。

石川沿いから天野山金剛寺を至て横山谷へ入り、神於山、鍋山間の基盤山地前面の窪地帯を通る国道170号線沿いには、サヌカイトを多量に出土する遺跡が分布している。すなわち、二上山周辺の遺跡群、国府遺跡、高向遺跡、福瀬遺跡、仏並遺跡では旧石器あるいは縄文時代のサヌカイト製石器が豊富にみられる。

このルートからは、主要河川を上流から下流へとたどって、岸和田市内の平地部をはじめとして、泉南地域の諸遺跡に出ることができる。縄文時代後期の石器を多量に出土した山ノ内遺跡は、牛滝川沿いの中位段丘面にある。石材の分析、同定等に検証すべき課題はあるが、このルートがサヌカイトの流通に関わっていたとする想定は、魅力的である。

なお、このルートの近くには、前述したようにサヌカイトに類似した安山岩の岩体が点在している。また岸和田市津川町のこそ谷では、大阪層群最下部からサヌカイト礫が産出している。鈴木（1979）⁽³⁾はこれらが石材として使用された可能性を示唆している。山ノ内遺跡から出土しているこれら安山岩に酷似した石材は、鈴木（1979）の考えを補強するものであろう。

平井遺跡は泉北台地に立地する。周辺の調査や本調査結果からみる限り、平井遺跡周辺の台地（段丘）の主たる開発は、平安時代以降と考えられる。

一方、段丘崖や段丘下の陶器川沿いに開けた低地の開発は古く、少なくとも弥生時代中期には始まっていた。この低地は古墳時代には盛んに利用されている。平井遺跡に隣接する小阪遺跡では、須恵器陶工集団のものと推定される集落（服部、1986）⁽⁴⁾が存在した。この遺跡の地下には伏尾段丘（低位段丘）が潜在していると考えられている。また、段丘崖斜面には、陶邑古窯址群の最北端に位置する窯跡の存在が知られている。（趙・藤田）

第2節 歴史的環境

平井遺跡は『茅渟県陶邑』と呼ばれた陶邑古窯址群の北辺にあたり、古代から開発の進んだ地域の一部である。当遺跡周辺においても、原池を挟んで隣接する小阪遺跡で古墳時代中期の初期須恵器工人の居住した集落が確認されている。5世紀中葉を本地域における重要な歴史的画期と見做すことができよう。もちろん、そこに至る旧石器時代から古墳時代前期までの遺跡も多数存在しており、連綿と続く人間の営みは看過し得ないものがある。しかしながら、本地域の、とくに石津川を中心とした地域の考古学的様相については既に詳細に記述された文献があり⁽¹⁾、また、後章に示すように本遺跡では古代から近世にかけての遺構・遺物が主体となっていることから、平井遺跡を理解するうえで必要な時空的範囲

に絞って歴史的な変遷を記しておきたい。

『和泉国大鳥郡蜂田郷』

和名類聚抄の記載である。「蜂田」はく波智太・波知多と訓読され、新撰姓氏録和泉国神別に『天兒屋命之後也』とみえる古代氏族、蜂田連の本貫地であるが、平井遺跡は蜂田郷の範囲に含まれる地域にあたる。蜂田郷域と想定される地域内では現在のところ明確な奈良時代の遺構は確認されていないが、平井遺跡の北約1 kmに位置する深井清水町遺跡（常^{フカヒ}凌郷）で7～8世紀の遺構が、南東約2 kmの大庭寺遺跡（⁽²⁾カミツミフ上神郷）では8世紀を中心とする十棟以上の掘立柱建物や木組井戸、溝などが検出されている。大庭寺遺跡は、蜂田氏の古爾比売の子である行基が建立した、いわゆる行基49院のひとつである、「大庭院」（天平21年、749年建立）の推定地に近接した遺跡である。

『当国は狭少の地、所在の庄園四十五箇所の中免九百八十余町、寄人千二百八十余人也』

平安時代末期、全国的に新立荘園が増加するが、和泉国においても同様に寄人が経営する権門寺社の荘園が増え、先に記した和泉国司の奏状によれば永承5年（1050年）には45ヶ所に達している。本遺跡周辺に関しては、石清水文書の保元3年（1158年）に石清水八幡宮領としての「蜂田庄」の名がみえ、12世紀中葉にはすでに荘園化されていたことがわかる。

『泉州八田郷依新立庄・・・・』

撰関家領八田庄に関する建長8年（1256年）6月の記事である。八田郷は蜂田郷の転化したものである。

13世紀代を中心とする鎌倉時代は、本遺跡においては多数の掘立柱建物や瓦器窯を検出した最も主要な時期となっている。当時、本地域は「八田郷」と称されており、上記のように撰関家（九条家）領の荘園の存在が推定されるほか、鎌倉幕府の支配として仁治元年（1240年）に佐々木信綱が新補地頭に任じられている。また、和泉国御家人に八田兵衛尉の名があり、当地の住人と考えられている。

先の九条家領荘園にみられるように、この時期は和泉国で荘園が発達する段階で、灌漑のための新池の築造や新田畑の開発が名主層を中心に行なわれ、農業生産力が向上した。また、荘民階層に貨幣経済が浸透したのもこの時期であり、荘民の商業活動を促した。「和泉国衛市場」（和泉市）は代表的な市として知られている。日常什器である瓦器の流通も当然それと無関係ではなく、瓦器窯の位置づけに深く関わる事項であろう。

この時期の遺跡としては、先述した大庭寺遺跡においてL字形にめぐる大溝に囲まれた11棟以上の掘立柱建物や井戸、土壇が検出されている。建物は3ヶ所の単位に分けられており、溝（堀）をめぐらした屋敷地が想定されている。また、平安時代末から鎌倉時代の掘立柱建物が検出されている太平寺遺跡、菱木下遺跡などがある。

『和泉国八田庄内平井村金剛院供僧職也』

応永9年（1402年）の金剛寺文書（天野山金剛寺、河内長野市）で、「平井」の名の文献上の初見である。

鎌倉時代後半から室町時代は、在地土豪が抬頭し、荘園が衰退に向かう時期であるが蜂田郷（八田郷）および八田庄の動向については詳らかでない。しかし、平井初出の文献によると平井村内に金剛寺領があったことがわかり、支配層の変遷はあったであろうが景観的には大きな変化はなかったものと考えられる。遺跡では、菱木下遺跡が継続し発達している。

『一八田之池二月五日普請初之事』

江戸時代、とくに中期の17世紀代は平井遺跡の一つの画期となっている。居住域から耕作域への転換である。

寛文4年（1664年）、平井村を含めた周辺の村は堺奉行水野元重の知行地となる。元重は知行地内において新田の開発を推進し、寛文8年に東山新田、伏尾新田、櫛葉新田などを大阪や堺の町人に請負わせて開発している。新田開発は年貢の増徴という目的はもとより、商品作物（換金作物）の畑地栽培が許されたことが主要な契機となっている。和泉地方の商品作物としては、菜種が有名である。

当地域の灌漑用水はすべて天水に依存しており、耕作にあたっては溜池が重要な役割を持っていた。上にあげたものは慶安2年（1649年）の石河勝政という人物による八田池普請条目の最初の部分である。当時の付近の村々の村明細によると、平井村およびその周辺には原池、八田池、字見坊池、芦池など10以上の溜池が存在したことが知られる。そのうち原池が最も大きく、広い池法を有していたが、八田池以外の池についてはその開削、普請の年代は不明である。和泉における溜池の状況からすると、古代もしくは中世にさかのぼる可能性もあろう。

現在の遺跡周辺では畑地の中に井戸を見いだすことができ、A地区東でも多数の井戸を検出している。これらの井戸は一様に深く、技術的には18世紀以降のものと考えられるが、おそらくは近代以降の掘削によるものであろう。やや極言ではあるが、江戸時代中期に現

在の平井の原景観が整ったものと見做されよう。

以上、平井遺跡の周辺に限って古代から近世に至る歴史を、主に文献から拾いだしてみた。遺跡調査は文献史の追証を目的としたものではないが、上記のような事項を念頭におき考えることは必要であろう。(宮野)

地理的環境

註

1. 吉川周作・那須孝悌・樽野博幸・古谷正和(1986) 「近畿地方に分布する後期更新世～完新世の火山灰層について」・地球科学、40巻1号18-38p.
2. 石神 怡(1988) 「泉州の弥生遺跡」.(財)大阪府埋蔵文化財協会編、『原史の和泉をさぐる』シンポジウム基調報告資料
3. 鈴木重治(1979) 「岸和田のあけぼの」. 岸和田市史編さん委員会編、『岸和田市史』第1巻、考古編、210p-247p
4. 服部文章(1986) 「初現的須恵器陶工集団と集落」.(財)大阪文化財センター編、第4回近畿埋蔵文化財担当者集会資料

参考文献

1. 市原 実・市川浩一郎・山田直利(1986) 岸和田地域の地質・地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)、地質調査所、148p.
2. 国土地理院(1965) 土地条件調査報告『大阪平野』. 99p.
3. (財)大阪府埋蔵文化財協会(1986) 「泉州の遺跡」昭和60年度発掘調査成果展解説、28p.
4. 同上 (1987) 第2回「泉州の遺跡」昭和61年度発掘調査成果展解説、30p.
5. 同上 (1988) 第3回「泉州の遺跡」昭和62年度発掘調査成果展解説、32p.

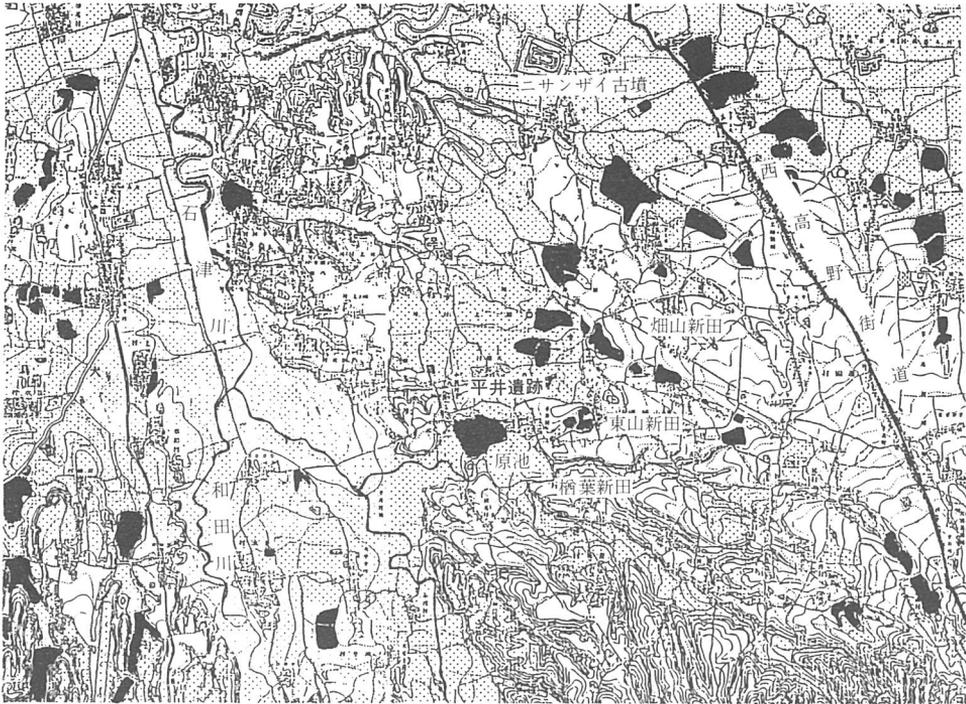
歴史的環境

註

1. (財)大阪文化財センター『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』(西浦橋遺跡・菱木下遺跡・万崎池遺跡・太平寺遺跡) 1984年
2. (財)大阪府埋蔵文化財協会『大庭寺遺跡現地説明会資料II』 1983年

参考文献

1. 角川書店『大阪府地名大辞典』 1983年
2. 平凡社『日本歴史地名大系第28巻 大阪府の地名』 1986年
3. 泉南市史編纂委員会『泉南市史』通史編 1987年
4. 大阪府史編集専門委員会『大阪府史』第三巻中世編I、第四巻中世編II、第五巻近世編I 1979年 81年 85年
5. 奥田 尚『古代の大阪』松籟社 1984年



第5図 明治初期平井周辺の景観



1. 鳳東町遺跡
2. 深井清水町遺跡A地点
3. 深井清水町遺跡B地点
4. 華林寺跡
5. 毛穴遺跡
6. 上遺跡
7. 鈴の宮遺跡
8. 八田北町遺跡
9. 堀上町遺跡
10. 東半田遺跡
11. 小阪遺跡
12. 八田西町遺跡
13. 万田遺跡
14. 万崎遺跡
15. 草部遺跡
16. 鶴田池東遺跡
17. 西浦橋遺跡
18. 菱木下遺跡
19. 菱木遺跡
20. 万崎池遺跡
21. 太平寺遺跡
22. 伏尾遺跡
23. 小代古墳群
24. 大庭寺遺跡
25. 深田橋遺跡
26. 菱木上遺跡
27. 山田北遺跡
28. 山田古墳群
29. 山田遺跡
30. 昭和池古墳
31. 陶邑古窯址群

第6図 周辺遺跡分布図 (1/4万)

第3章 平井遺跡の地形と地質

第1節 平井付近の地形・地質の概要

平井遺跡は石津川の支流陶器川右岸にあり、泉北丘陵から派生し、西除川と陶器川とにはさまれた広大な扇状地性段丘（泉北台地）の西側に位置する。現海岸線からは5～6 km 隔っている。

本報告書の調査地は、平井遺跡を東西に横断し、東は泉北高速鉄道から、西は原池までの約750mにおよぶ。（第7・8図）

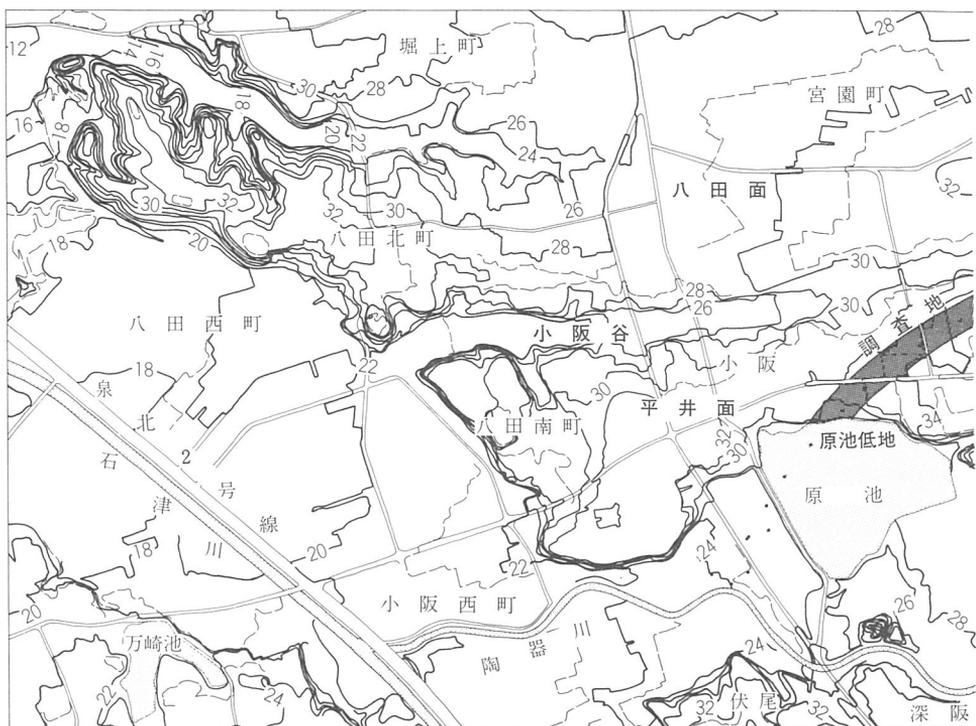
この地域の地形は4分類される。すなわち、東から段丘面、段丘上の浅い谷、段丘面、および段丘崖から沖積面である。いずれの地形面も西側の石津川に向かってゆるく西傾斜する。

調査地の最も北にある段丘面を八田面と仮称する。八田面は堺市平岡町大池から泉北高速鉄道深井駅を経て陶器北地区にほぼ直線上に延びる西北西—南南東方向の浅い谷地形以南に広がる。平均勾配は9/1000である。東八田にある調査地A東区がこの面にあたり、標高T.P.+約35mある。

八田面の南には、八田南町から小阪、調査地の小池、芦池、鴨坂池を至て東山に延びる浅い谷地形がほぼ東西方向に分布する。この谷地形を小阪谷と仮称する。下流の八田南町では谷幅約120m、谷底と段丘面との比高は約10mで谷底は平坦であるが、谷の開口部から約1.5km上流にある芦池では谷幅こそ約70mあるが、深さは2～5mで、段丘崖は発達せず、周辺の段丘面が谷にむかってゆるやかに傾斜するにとどまる。本調査地のA池地区がこれにあたる。

なお後述するように、芦池付近の谷幅は近世に池底の開削・浚渫を受けているため、それ以前はかなり小規模のものであったと推定される。

小阪谷の南に広がる段丘面を平井面と仮称する。八田南町から、小阪・平井を至て東に延びるほぼ東西方向の台地状の地形面である。東山付近で小阪谷が尖滅し、前述の八田面に連続する。平均勾配は9/1000であるが、原池北側で鞍部となる。平井面のほぼ中央、馬背部分を主要地方道泉天津美原線が通っている。本調査地のA西地区、B地区、C地区、D地区の一部がこの面にあたり、標高T.P.+32～35mある。

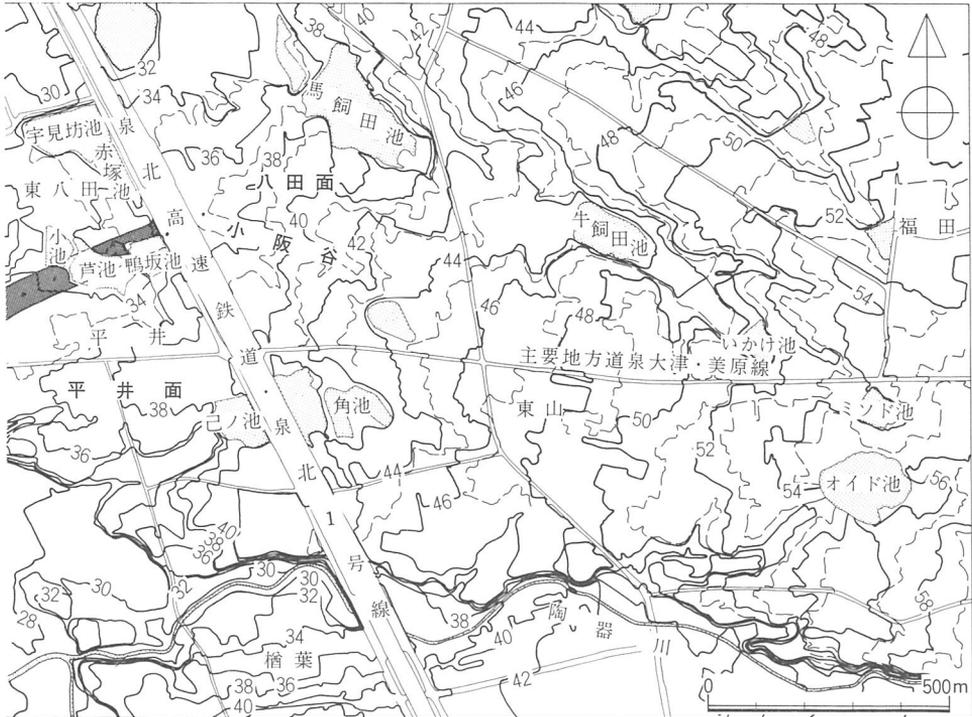


第7・8図 平井遺跡とその周辺の地形

平井面の南は段丘崖をへて原池および陶器川の沖積低地が分布する。この地形面を原池低地と仮称する。平井面との比高は、原池付近で4～7mある。原池低地は調査地のD区の一部にあたり、標高はほぼT.P.+27mである。この地形面は陶器川に沿って広がり、石津川流域の氾濫平野へと連続する。

平井面や八田面をつくる段丘がどの時期に形成されたかについては諸説がある。

日下ほか(1980)⁽¹⁾は段丘I(高位)と呼び、層厚2mほどの赤色化された砂礫層からなり、基盤の大坂層群を刻み込んで堆積しているという。古環境研究会(1982)⁽²⁾は、平井遺跡が中位段丘から上位段丘にまたがって立地するとし、この地域では、段丘間の比高は大きくないとしている。また上位段丘は大部分が大坂層群よりなるという。この地形分類は前葉(1984)⁽³⁾によってほぼ踏襲されているが、上位段丘を高位段丘と呼び改めている。一方、市原(1984)⁽⁴⁾、市原ほか(1986)⁽⁵⁾は高位段丘とし、地質図には段丘崖に不整合で、下位の大坂層群が分布するように表現されている。これに対して、藤田ほか(1985)⁽⁶⁾は、段丘面を高位(段丘)面と呼び、大坂層群上部亜層群の堆積面である、としている。要するに、段丘面の分類とその形成期は、段丘を構成する地層対比の問題であるといえよう。



(調査地付近の黒丸印は第9図のボーリング位置を示す。)

平井付近の推定断面図を第9図に示す。原池低地の地下には、比較的明瞭な不整合が推定される。不整合面の上には、下位より礫層、砂層、シルト～粘土層が重なり、現代耕土層に覆われる。

礫層は3～6mの層厚があり、段丘崖の古崖錐堆積物に連続すると推定される。後述するように、古崖錐堆積物は旧石器時代に比定され得ることから、この礫層が低位段丘構成層に対比されると考えられる。

中位の砂層は、シルト層、礫層を挟んでおり、層厚は1～4mある。N値は上位層より相対的に高く、10～20を示す。

上位のシルト～粘土層は砂層、礫層を挟んでおり、層厚は2～6mある。後述する原池低地のa～o層に連続すると推定され、沖積層中部・上部層準に対比される。したがって中位の砂層は沖積層下部層準に対比される可能性がある。ただし、低位段丘構成層との不整合関係は明らかでない。

低位段丘構成層基底の不整合面下には、平井面から連続する砂、泥互層が分布する。上半部の層厚約35mは砂・礫優勢であり、層相変化に富む。下半部はシルト・粘土優勢であ



第9図 平井付近の地質断面図（ボーリング位置は第7・8図を参照）

り、比較的連続性に富む。日本道路公団大阪建設局大阪工事事務局(1987)⁽⁷⁾は、平井面下のT.P.+7~15mにある礫層の基底をもって不整合とし、上部を高位段丘堆積物に、下位を大阪層群に対比している。しかし、第9図においては、その境界が不整合かどうかは判定し難い。また、市原ほか(1975)が高位段丘堆積層と大阪層群とを区別した不整合面を段丘崖部分に推定することは困難である。さらに、古環境研究会(1982)や前葉(1984)が示した上位(高位)段丘と中位段丘との境界を示すような違いは、少なくとも当地域においては、地形的にも地質的にも認められない。また、日下ほか(1982)がいう段丘I(高位)の堆積層は分布しないが、しいてこれを当地域の段丘上に薄く分布し、段丘堆積層を不整合に覆う古崖錐堆積物の相当層(後述するB地区の赤色風化砂質シルト層など)にあてはめるならば、後者は低位段丘構成層の相当層の可能性こそあれ、高位段丘に属するものでないことは明らかである。

以上のように、平井面や八田面を構成する地層については、その所属を明確にし得ないのが現状である。その解明は、今後の地形学的、地質学的検討に期待することとし、以下ではとりあえず段丘構成層と呼ぶことにする。(趙)

第2節 平井遺跡の層序

前述したように、平井遺跡は複数の地形にまたがって分布しており、そこに形成された地層は多様な層相を示す。たとえば、段丘上の地層は大半が非水成相であるのに対して、沖積低地の地層は水成相を多く介在する。

本遺跡の層序の確立にあたって、筆者らが用いようとした手法——すなわち、各地区ごとに層序区分を行ない、鍵層となる地層を手掛りとしながら、出土遺物によって分帯したのち、対比し、全域の層序を組み立てる手法——は、層位学の基礎的手法である。その際、地層が典型的に累重する地域を地層の模式地として、地層対比の軸にすることは、対比が円滑にすすめられるだけでなく、問題点が一早く明らかになるので、確実な対比を行うためには必要な手順である。

本調査においては、D地区南部の原池低地を模式地とした。それは、この地点の地層が厚く、かつ細かく区分でき、しかも、地層ごとの包含遺物が豊富であるからであり、換言すれば、沖積平野における層序区分と同程度の精度と情報量とが期待されたからである。とはいえ、本書で述べる層位学的成果には、未だ多くの検討すべき余地が残されている。その原因は、調査時間の問題もさることながら、記載・分類段階での基準の不一致による

ところが大きい。

以下に、模式地である原池低地の標準層序を述べ、つづいて各地区ごとの層序を述べることとする。なお、碎屑物の粒度区分尺度は地質学で一般に用いられているWentworth式(角、1970)⁽⁸⁾を原則として用いた。また、遺構検出面の認定に関しては、趙(1983)⁽⁹⁾にもとづいて、上面・下面・基底面検出遺構を区別した。

1. 平井遺跡の標準層序(原池低地)

平井遺跡の地層の模式地である原池低地はD地区南にあり、原池に接するT.P.+27.1～27.2mの沖積低地である(第7・8・9図)。

この地区の地層は不整合によって沖積層といわゆる地山層に区分される。さらに沖積層は非整合面および層理面によって17層に細分される。また、いわゆる地山層は不整合面によって2分される。以下、上位より記載する(第10・12・17図)。

(1) 沖積層

第1層： にぶい黄褐色砂質シルト～粘土層であり、層厚は約15cmある。現代耕土層である。

a層： 黄褐色砂質粘土からなる非水成層であり、下半部は砂粒が多い。層厚は約10cmである。

b層： 明黄褐色シルト質粘土層であり、層厚は平均8cmである。下半部は粗粒砂を含み、砂質となる。また、変形してはいるものの、中粒砂～細粒砂からなるラミナが断続的に挟まれており、水成層の堆積構造を示す。

本層には近世～近代に比定され得る唐津焼、備前焼、波佐見焼等の陶磁器類が包含される。また、古墳時代の須恵器も多数含まれる。

c層： 暗灰黄色砂質シルトからなる非水成層であり、層厚は平均10cmである。細礫を含み、砂は粗粒砂が主体である。

本層には多時期の遺物が包含されるが、近世末から近代初頭に比定され得る信楽焼、波佐見焼などの陶磁器類が最新の遺物である。

本層の上面には溝が検出された。また、本層の下面にも交叉する溝と犁溝が数条検出された(第80図)。

d層： 明褐色～明赤褐色の砂質シルトからなる非水成層である。層厚は5～25cmであり、原池寄りでは2～3層に細分され、上部に粗粒砂が多くなる。

本層には多時期の遺物が包含されるが、近世に比定され得る陶磁器類が最新の遺物であ

る。

e層：黄褐色を基調とし、砂質シルト・シルト質細粒砂・粘土等の偽礫（いわゆるブロック）、および少量の中～細礫の基質からなる偽礫層である。層厚は原池寄りでは10cm～23cmあるが、段丘崖寄りでは数cm以下と薄く、下位層上面の遺構内を埋めているのにとどまる。偽礫は半固結の垂角礫が主体で径0.5～4cmあり、偽礫の大半が後述する段丘構成層に、また一部はf層以下の沖積層に由来する。

本層には多時期の遺物が少量含まれるが、中世末から近世前半に比定され得る土師器、陶磁器等が最新の遺物である。

f層：灰黄色砂質シルトからなる非水成層であり、細礫を含む。層厚は平均10cmである。

本層には多時期の遺物が包含されるが、近世前半に比定され得る波佐見焼等の陶磁器類が最新の遺物である。

本層上面では畑（D-349-OZ）が検出された。したがって本層は作土層である。

f/g層：灰オリーブ～暗黄褐色を呈するシルト・粘土・砂質シルト等の偽礫と同質の基質および大～細礫からなる偽礫層である。本層は後述する谷状遺構（D-100-OX）の上部層として分布し、最大層厚は、2.4mである。偽礫は長径数cm大のものが多く、未固結で形状は歪であり、基質との境界が不明瞭なものがある。偽礫の大半は本層より下位の沖積層に由来し、一部、段丘構成層起源のものが混じる。また、基底には下位層の2次堆積物が挟まれ、水成のラミナ構造をもつ（第64図）。

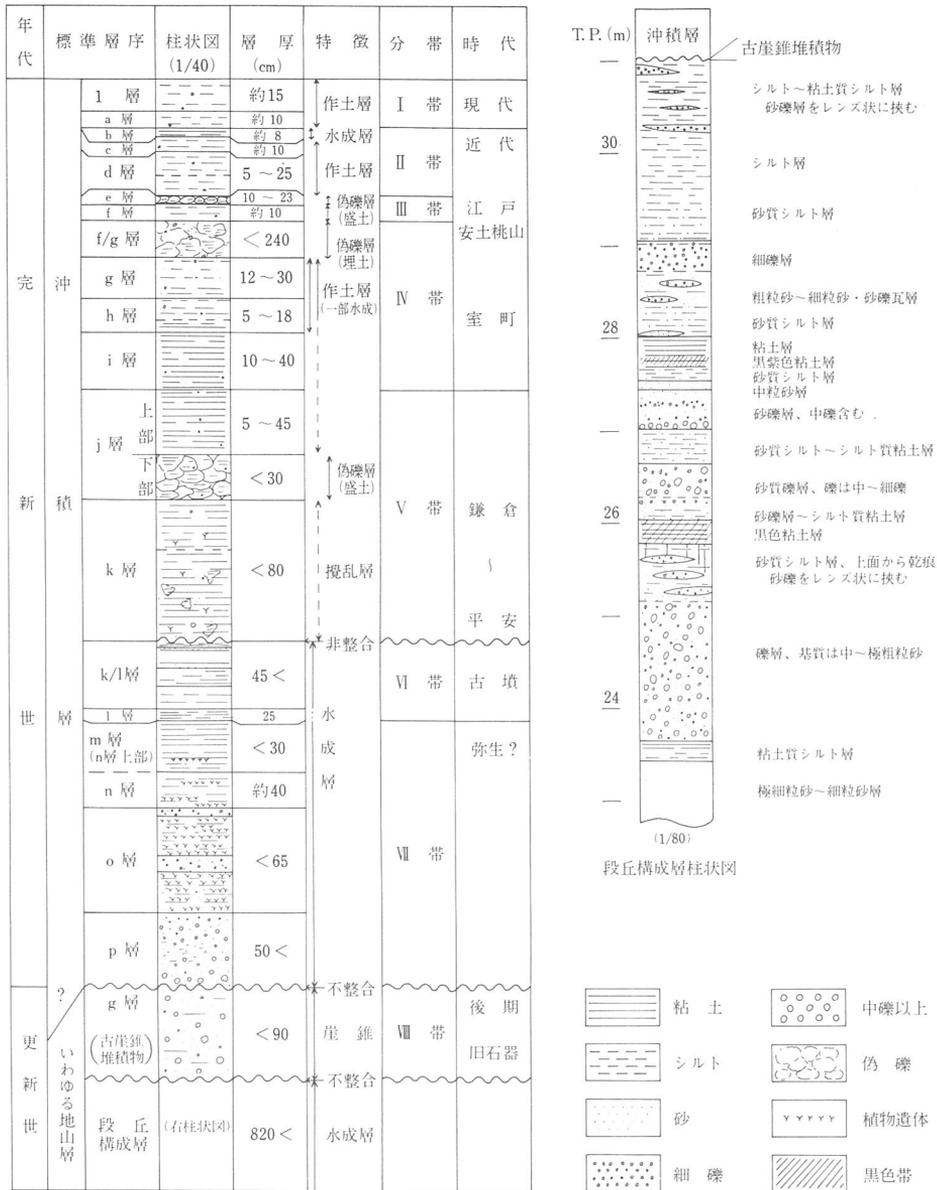
本層には中世以前に比定し得る遺物が包含される。

g層：灰黄褐色砂質シルトからなる非水成層と、同時異相で、灰色を基調とし、礫、砂・シルト・粘土の薄層・ラミナによって構成される水成層とからなる。

前者は、段丘崖の南数mに分布限界があって、その南側の原池低地に分布する（第51図）。粗粒砂、中～細礫が比較的多く混じる。層厚は12～30cmで原池寄りに厚く、2～3層に細分され得る。本層には中世以前に比定され得る陶磁器、土師器、瓦質土器等が含まれる。

後者はD-100-OXの中部層として分布し、最大層厚は70cmである。砂質シルトの未固結の偽礫（径数cm～15cm）を含む（第64図）。本層には中世以前に比定され得る土師器、瓦質土器等が含まれる。

h層：赤褐色～橙色の砂質シルト～砂質粘土からなる非水成層と、これと同時異相で砂礫～砂質粘土からなる水成層によって構成される。



第10図 平井遺跡の標準層序

前者はg層とほぼ同様の分布をもち、層厚は5~18cmある。砂は粗粒が主体であり、細礫を含む。原池寄りでは2層に細分され得る。

後者はD-100-OXの下部層として分布し、最大層厚は130cmである。本層の上半部には段丘構成層に由来する粘土・シルトの未固結偽礫(径数cm~25cm)を多く含む(第64図)。

h層には中世以前に比定され得る土師器、瓦質土器等が包含される。

i層：灰オリーブ色~灰黄色の砂質シルト~砂質粘土からなる非水成層である。砂は

全般に細粒～中粒砂が優勢であるが、原池寄りでは粗粒砂が多く、細礫を混る。層厚は10～40cmで原池寄りで厚い。

本層には中世に比定され得る土師器、瓦質土器、中国製青磁等の遺物が包含される。

j 層 : 本層は層相の差異によって上・下部に2分される。

j 層上部は青味をおびた灰色粗粒砂質粘土からなる非水成層である。細礫～中礫を含む。層厚は5～45cmであり、原池寄りで厚い。そのうち上半部5～10cmは、不明瞭な境界によって下半部と区別され、灰白色を呈する。g 層の分布北限よりさらに3m南に分布限界がある(第51図)。

j 層下部は灰色粘土・黄灰色シルト等の未固結偽礫と、砂礫の基質からなる偽礫層である。水成のラミナ構造は認められない。層厚は30cm以下で、原池寄りのT.P.+25.3m以下の低地を埋めている。j 層上部とは不明瞭な境界で区分される。偽礫はj 層上部に直接覆われる段丘寄りの段丘構成層の層相に酷似する。

j 層には、瓦器、土師器、白磁、木器等が含まれるが、瓦質土器は含まれない。

k 層 : 黒褐色粘土質シルトからなる非水成層である。層厚は80cm以下で、原池寄りのT.P.+25.3m以下の低地に分布する。中礫～細礫をわずかに含み、層厚の薄い段丘崖寄りでは全般に砂質となる。本層の下半部には下位の1層に由来する未固結で歪な偽礫が多量に含まれ、また、本層の下面は波状に著しく変形している。

本層には黒色土器、瓦器、土師器、白磁、および石器、木器、動物遺体、植物遺体が含まれ、保存状況が良好である。

本層の上面には土壌(D-250-00等)が検出された。また、下面では踏込み跡と考えられる多数の浅い小穴が検出された。

k/1層 : 灰色～暗褐色を呈する砂泥互層であり、上部より極細粒砂質シルト薄層、中粒～粗粒砂薄層、細粒砂質シルト薄層、シルト質砂礫薄層、細粒砂質シルト薄層、植物遺体含有シルト薄層からなり、乱堆積している。いずれも層厚は数cm～15cmであり、全層厚は45cm以上である。本層は上位層とは非整合関係にあり、下位の1層上面がつくる緩斜面上に残存する。また、分布高所では上述の薄層群は取剣し、細分されない。

本層には古墳時代の須恵器が包含される。

1層 : 繊維状の植物遺体が密集する黒色粘土質シルト層であり、層厚は25cmである。T.P.+25.7m以下の原池寄りに分布するが、k/1層に覆われないところでは、直接k層に覆われ、上半部が攪乱されている。

本層には古墳時代の須恵器が包含されている。

m層（n層上部）：オリブ灰色シルト質粘土層であり、層厚は30cm以下である。原池寄りのT.P.+24.4m以下の地域に分布する。n層上部とは同時異相の関係にある。最上部に2～3cmの植物遺体密集シルト質粘土薄層を伴う。

本層には畿内第Ⅲ様式の弥生土器、およびサヌカイト製剥片が包含される。ただし、出土した遺物は、1層から落込んだ（踏込まれた？）可能性が認められたが、現地で結論を出し得ず、問題点として残された。

n層：黒褐色粘土質シルト層であり、層厚は約40cmである。中に挟まれる大型植物遺体密集帯を境に上・下部に2分される。上・下部ともに微細な植物遺体からなる厚さ数mmの平行ラミナが観察される。

o層：黒褐色砂質植物遺体層であり、層厚は65cm以下である。中部層準と最上部層準に層厚10cm以下の砂礫薄層をレンズ状に挟む。T.P.+23.9m以下の原池寄りに分布する。本層からは考古遺物は発見されていない。

p層：灰白色砂礫層であり、層厚は50cm以上ある。礫は中礫～細礫の円～亜円礫であり、まれに大礫が混る。砂は極粗粒砂が主体である。また、未固結のシルト質細粒砂偽礫が含まれる。植物遺体は少ないが、全般に含まれる。

本層からは考古遺物は発見されていない。

(2) いわゆる地山層

q層（古崖錐堆積物）：緑灰色シルト質砂礫層であり、層厚は90cm以下である。下位層の斜面に沿って分布する。礫は中礫から大礫であり、砂は粗粒砂から細粒砂である。全般に層理は発達せず、淘汰が悪い。p層以上の地層に不整合で覆われる。また、分布高所の不整合面には顕著な乾痕が観察される。

本層からは風化したサヌカイト製剥片が1点出土した。

段丘構成層：平井面を構成する地層である。D地区で観察された段丘構成層のT.P.+31.0m～22.8m間の地質柱状図を第10図に示す。この間の地層は全般的には砂、礫層とシルト、粘土層の互層であり、上半部は細粒の碎屑物が優勢であり、下半部は粗粒の碎屑物が優勢である。T.P.+25.8m付近の黒灰色粘土層に覆われる砂質シルト層上面には乾痕がみられ、また3層準ある礫層の基底は直下の下位層を削剥してはいるが、これらの間に不整合関係は認められない。

2. 各地区の沖積層層序

原池低地以外の平井面（A西、B、C、D地区）、小阪谷（A池地区）、八田面（A東地区）に分布する沖積層は、大半が非水成層であり、主たる形成要因は人為にもとめられる。以下に、各地区の沖積層層序を、原池低地に隣接するD地区平井面より順次述べる。なお、各地区の第1層は現代耕土層であるので省略する。

(1) D地区（平井面）

D地区は原池低地を除いて6平坦面に区画されている（第11図）。I・II・VI区は段丘面上にあたり、II～V区は段丘斜面部分にあたる。ここではI区～VI区を一括してD地区平井面として扱う。

本地区の層序断面図を第12図に示す。

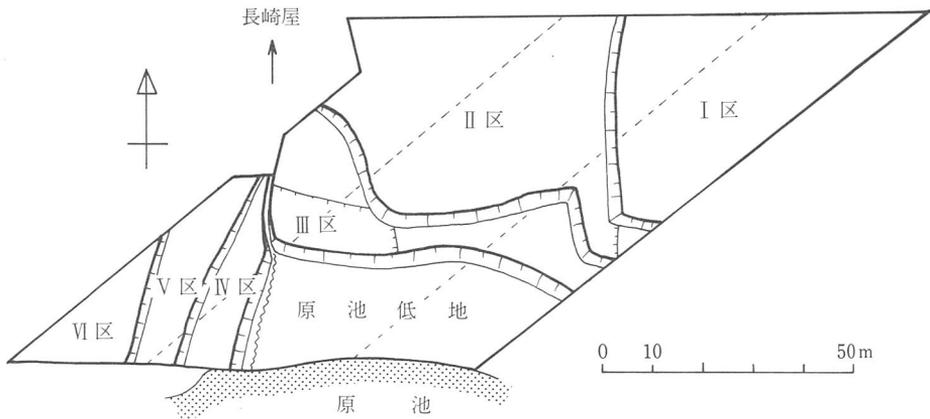
第1.5層： 灰黄褐色砂質シルトからなる非水成層であり、層厚は2～10cmある。上位の第1層に伴って分布する。本層の下面には小溝群が検出された。

第2層： 灰黄色砂質シルトからなる非水成層であり、層厚は平均5cmである。ほぼ全域に断続的に分布する。近代以前に比定し得る遺物を包含する。

本層の下面には小溝群が検出された。

第3層： にぶい黄灰色砂質シルトからなる非水成層である。層厚は約10cmであり、ほぼ全域に断続的に分布する。近世以前に比定し得る遺物を包含する。

第4層： 灰白色を基調とする未固結のシルト・シルト質粘土の偽礫と、少量の細礫・砂の基質からなる偽礫層である。III・V区の下位層上面の遺構を層厚約40cmで埋積するは



第11図 D地区平坦面の呼び名

か、I区01-OX最上部層、V区の下位層上面の遺構埋土として分布する。偽礫は主として段丘構成層に由来する。

第5層：灰黄色砂質シルト層で層厚は10～15cmである。III～VI区およびI区01-OX上部層の水田あるいは畑の土壌として分布する。本層には近世前半に比定し得る遺物が少量包含される。

第6層：第5層の下位にあり、後述する第7層の上位にある地層、遺構埋土を一括して当地区の第6層と呼ぶ。III区～V/VI区間斜面では、灰白色～にぶい黄橙色の粗粒砂質シルト層が層厚10～60cmで分布する。厚いところでは2～3層に細分され、基底部に層厚15cmの偽礫層を伴うことがある。また、各面間の斜面部分にも厚く分布する。

本層には瓦器、土師器、瓦質土器等の中世遺物が包含される。また、本層の下面には犁溝と考えられる小溝群が検出された。

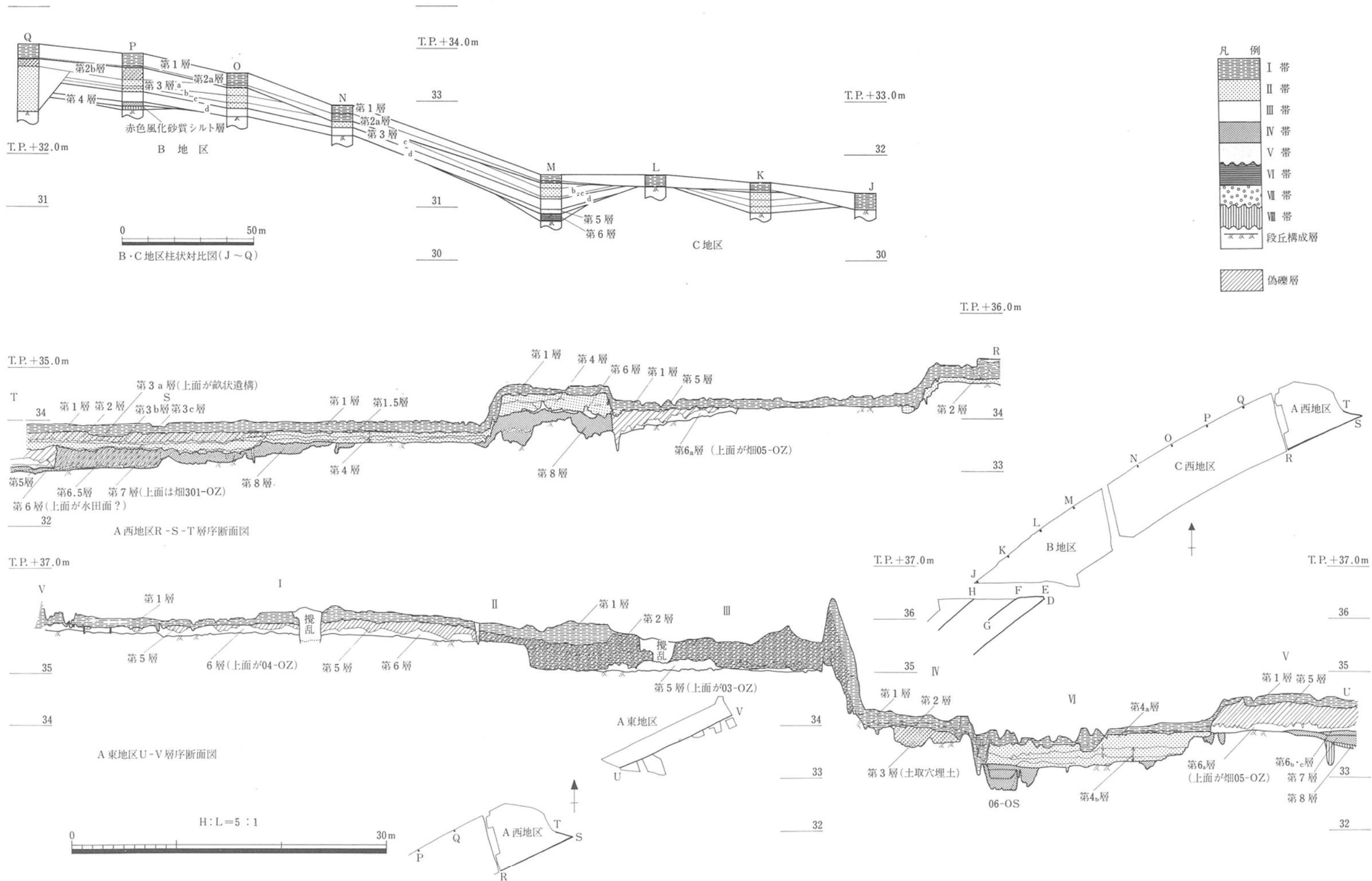
I区の01-OX中部～最下部層、II区の02-OX・03-OS、VI区の82-OXなどに代表される水利に関連する遺構の埋土には、主として土師器、瓦質土器等の中世後半（室町時代～安土桃山時代）に比定され得る遺物が包含され、少なくともこれらの遺構のうちいくつかは第5層の下位にあり、後述する第7層の上位にあることにより、これらの遺構埋土は、当地域の第6層に対比される。詳細は後述するが、これらの遺構埋土に共通する層序は、上位より偽礫層、粘性のある砂質粘土層、偽礫を含む砂礫層あるいは偽礫層である。

第7層：にぶい黄橙色を基調とし、炭化物・粘土偽礫を含有する水成（水つき状）の砂質シルト層であり、IV・V区の溝（84A-OS）を構成する（第69図）。最大層厚は65cmである。中世前半（鎌倉時代）に比定し得る瓦器、土師器の小片を少量包含する。偽礫は径数cm～25cmあり、主として後述する第9層に由来する。

I・II区の段丘構成層を不整合で覆う第2層、第3層、および第6層のそれぞれの基底面で検出された建物・ピット群・溝の遺構埋土（主として暗褐色砂質シルトからなる）には、瓦器、土師器等の中世前半（鎌倉時代）に比定し得る遺物が含まれることから、これらは第7層に属する。

第8層：V区の小谷（84B-OX）の上部層として分布する砂泥互層であり、上位より褐色細粒砂質シルト薄層、灰褐色細礫混り極粗粒砂～細粒砂薄層、明黄褐色極細粒砂～砂質シルト薄層からなる（第69図）。各薄層は層厚10cm前後であり、全層厚は35cmである。古墳時代の須恵器の小片が包含される。

第9層：黒味がかったにぶい褐色のシルト質粘土層であり、層厚は10cm以下である。



第13図 層序断面図2

84B-OXの下部層として分布する。本層には古墳時代の須恵器の小片が包含される。第9層は古崖錐堆積層（標準層序のq層）を直接不整合で覆う。

(2) B・C地区（平井面）

本地区の柱状対比図を第13図に示す。なお、この地区の碎屑物粒度の記載には、Wentworth式を用いず、慣用的な語句を用いた。

第2 a層：灰黄色粘質土層であり、層厚は5～13cmである。非水成層であり、第1層直下に伴って分布する。

第2 b層：明黄褐色粘質土からなる偽礫層であり、層厚は12～25cmある。B地区北東部の一区画に分布する。偽礫は主として段丘構成層に由来する。

第3 a層：にぶい黄橙色を呈する非水成の粘質土層であり、層厚は10～16cmである。B地区北西部やC地区の一部などの現地盤高が相対的に低いところをのぞいて、断続的に分布する。第2 b層に覆われる本層の直上には層厚数cmの砂礫層を伴ない、また上面には断面三角形～台形の畝状遺構が検出された。この畝状遺構は後述するA西地区の01-OZと同種の遺構である。また、本層の下面には犁溝等の小溝群が検出された。

第3 b・c層：上半部がにぶい橙色で下半部が黄褐色を呈する非水成の粘質土層であり層厚は10～24cmある。b・cの区別は色調の違いによるものである。本層の下面には犁溝等の小溝群が検出された。

第3 a層と第3 b・c層には近世以降に比定され得る日本製陶磁器類が含まれる。

第3 d層：黄褐色を呈する非水成の粘質土層であり、層厚は15～20cmである。C地区西部をのぞく、ほぼ全域に分布する。本層には近世以降に比定され得る日本製陶磁器類が含まれる。

第4層：黒褐色を呈する主として非水成の粘質土層であり、層厚は5～8cmである。B地区北東部の一区画に分布する。本層には瓦器、瓦質土器、土師器等の中世に比定され得る遺物が含まれる。

本層の下面および基底面には、掘立柱建物、ピット群、溝、土壌等の多数の遺構が検出された。

第5層：にぶい黄褐色～黄褐色を呈する非水成の粘質土層であり、層厚は最大40cmである。C地区の谷状地形281-OXを埋積する。2層に細分され得る。本層には黒色土器をはじめ、平安時代に限定され得る遺物が包含される。

第6層：281-OXの下位にある溝76-OS内の堆積層であり、灰黄色から黒褐色を呈

する粘質土、粘土、砂、礫の薄層～ラミナからなる。最大層厚は80cmである。本層には古墳時代の須恵器が包含される。

第6層～第4層は、いわゆる地山層を直接不整合で覆っている。

(3) A西地区（平井面）

本地区の層序断面図を第13図に示す。

第1.5層：灰白色～緑灰色を呈する粗粒砂質シルト層で細礫を含む。層厚は10cm以下であり、第1層に伴なって分布する。

第2層：南東部の01-OXを覆う偽礫層である。層厚は10～20cmである。偽礫は黄橙色シルト～細粒砂が主体であり、段丘構成層に由来する。

北・西部には第2層に相当する非水成の粗粒砂質シルト層が層厚10cm前後で分布する。細礫を含む。酸化鉄の著しい汚染により褐色を呈する。

第3層：01-OXを構成する一連の非水成層を第3層と呼ぶ。a・b・cに細分される。

第3a層は灰白色砂質シルト層であり、細礫を含む。平均層厚は2～3cmである。上面の標高はT.P.+33.6mであり、畝状遺構（01-OX）が検出された。

第3b層は明黄褐色砂質シルト層であり細礫から中礫を含む。層厚は5～10cmである。

第3c層は灰白色シルト層であり、下半部は明黄褐色を呈する。

第3層には近代以前に比定し得る陶磁器類が含まれる。

第4層：黄橙色砂質シルト層であり、砂礫を含む。北東部および南部に分布する。層厚は最大30cmで平均15cm前後である。南部の厚いところでは3層に細分され得る。本層には瓦質土器のほか近世以前に比定し得る土師質土器が含まれる。

本層の下面には犁溝、あるいは畝間と考えられる小溝群が検出された。

第5層：南部の低位層上面の遺構を覆う偽礫層であり、層厚は最大75cmである。偽礫は段丘構成層に由来する淡黄色シルト・黄橙色シルト質細粒砂と、A池地区中部／下部間堆積層に由来する灰白色～灰黄色シルト質、粘土とからなる。前者が半固結で塊状であるのに対して、後者は未固結で不定形であり、偽礫内の細粒砂ラミナの変形が著しい。

本層の上面標高はT.P.+33.9～34.2mである。

第6層：明オリープ灰白粗粒砂質シルトからなる非水成層であり、層厚は10～25cmある。南部に広く分布し、北東部では第4層に直接覆われて残存する。層厚の厚いところでは2層に細分され得る。

本層上面には畑（02-OZ）と水田？が検出された。したがって、本層は作土層である。本層には近世前半以前に比定し得る遺物が包含される。

第6.5層：南東部の301-OZを覆う偽礫層である。層厚は約35cmである。偽礫は段丘構成層に由来する黄色シルトと当地区第8層に由来する暗褐色シルトからなり、基質も暗褐色シルトである。ただし、第5層では主たる構成要素であったA池地区中部／下部間堆積層に由来する偽礫は含まれない。

第7層：黄灰色細粒砂質シルト層であり、畑（301-OZ）を構成する。したがって、本層は作土層である。層厚は10cm以下である。本層には中世以前に比定し得る遺物を少量包含する。

第8層：灰色粗粒砂質シルトからなる非水成層である。層厚は最大40cmで全域に断続的に分布する。本層には瓦質土器、瓦器、土師器等の中世以前に比定し得る遺物が含まれる。また、本層下面には、これらの遺物を埋土に含むピット群、土壌等が検出された。

第8層は段丘構成層を不整合で覆う。

(4) A東地区（八田面）

本地区の層序断面図を第13図に示す。

第2層：第1層の下位にあり、近代遺物を包含する地層を一括して第2層と呼ぶ。03-OZを覆う偽礫層は最大層厚110cm以上あり、鴨坂池の堤盛土層に連続する。偽礫は主として段丘構成層と後述する当地区第6層に由来する。また、芦池北側の低地北部には、第1層に伴って、その下位ににぶい黄褐色砂質シルト層が分布する。

第3層：土取穴（第52図）の埋土層である。段丘構成層に由来する半固結の偽礫が主体であり、第4層以下の沖積層に由来する偽礫、および、給源不明の耕作土と思しき砂質シルトの偽礫が少量混る。

本層中に含まれる遺物は、少量の須恵器、瓦器、土師器、瓦質土器等の細片のほか、より新しい年代を示すものとして、陶磁器片と燻瓦がある。この燻瓦は、本層上面から掘り込んでいる井戸（02-OX）の掘り方埋め土内に含まれているものと同質で、近世末～明治時代に比定されるものである。

第4層：芦池の北側の低地に分布する非水成層である。4a・4bに2分される。

第4a層は黄灰色シルト層であり砂・細礫を含む。粘性があり、層厚は約30cmある。本層には少量の須恵器、土師器、瓦質土器、陶磁器の細片が含まれている。

第4b層はにぶい黄褐色～暗灰黄色を呈する砂質シルト層であり層厚は約25cmある。

本層に含まれる遺物は上位の第4 a層と全く同じである。特に本層の時代を特徴づけるものはない。

第5層：04-OZ、05-OZを覆う偽礫層である。層厚は最大50cmである。偽礫は段丘構成層と後述するA池地区下部／中部間堆積層とに由来する。

本層からは極く少量の瓦器、瓦質土器、磁器の各細片が出土した。

第6 a層：04-OZ、05-OZ、03-OZを構成する作土層である。主としてにぶい黄色砂質シルトからなる。04-OZでは段丘構成層を直接不整合に覆い、直下の段丘構成層に由来する偽礫を比較的多く含む。

本層には15・16世紀の瓦質土器、土師器、およびこれを再加工した土製品のほか、サヌカイト製剝片、須恵器片が含まれる。

第6 b層：04-OZを構成する第6 a層の直下であり、第6 a層と同質の砂質シルトからなる。層厚は平均15cmである。本層の上面および内部には、畑の畝間と考えられる小溝群が断続的に検出され、段丘構成層に由来する偽礫が埋めている。

本層から出土する遺物は第6 a層と同じである。

第6 c層：第6 b層の直下にある黄褐色砂質シルトからなる非水成層である。層厚は平均10cmである。

本層中の遺物も第6 a・b層と共通し、サヌカイト製石鏃（第83図）が出土している。

第7層：西部の芦池沿いに分布する黄褐色砂質シルト層であり、層厚は20～35cmである。細礫～中礫を含む。層厚の厚いところでは、下半部が明黄褐色を呈する。

本層には、磨滅した状態ながら瓦器碗片が散見され、その比率は第6層よりも多い。本層上面には第6 c層を埋土とする小溝が数条、第6 a層の耕作土畝溝と近似する方向で認められた。

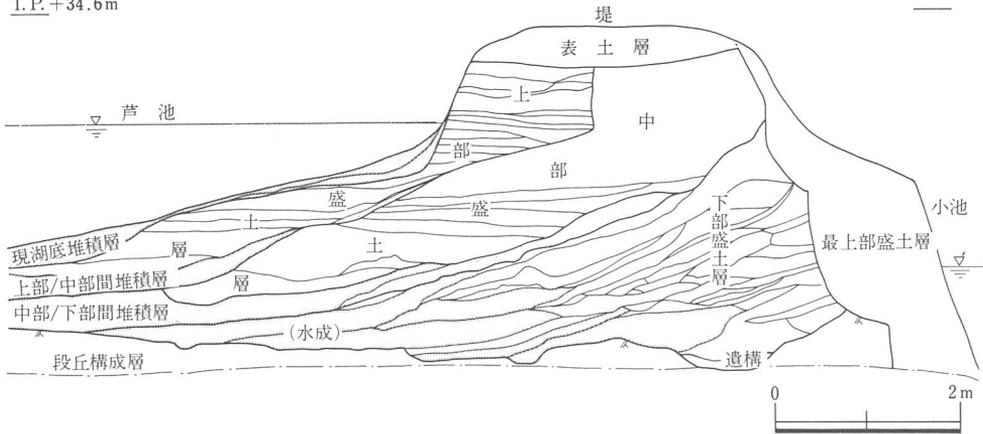
第7層は不整合でいわゆる地山層を直接不整合に覆う。

(5) A池地区（小阪谷）

芦池・鴨坂池の池底には、層厚20～50cmの現池底堆積層がほぼ平坦な段丘構成層を直接不整合に覆って分布する。小阪谷のそれぞれ下流部にあたる両池の西部には、現池底堆積層の下位に、旧小阪谷地形を埋積したと推定される堆積層が存在することが明らかとなったが、諸事情により調査には至らなかった。

芦池と小池を境とする堤は、池底堆積層や斜面流出物を挟んで4期の盛土層からなる。盛土層は最上部盛土層をのぞいて、いずれも主として段丘構成層に由来するシルト・砂・

T.P. +34.6m



第14図 A池地区芦池・小池間堤断面図（断面位置は第81図No.6 トレンチの南壁）

礫からなる。以下にこの堤の層序を上位より概説する（第14図）。

最上部盛土層：小池側の堤斜面を構成する現代の擁壁と、その裏込め堆積物である。堤の表土層とは一部削剝し、一部覆われる同時異相である。

上部盛土層：下位層の削剝斜面を覆う盛土層である。芦池側の堤斜面を構成する。全層厚は2.3mあり、層厚数cmから25cmを単位とする盛土薄層が、ほぼ水平に累積する。本層には水成層は挟まれない。

本盛土層には、近世以降の瓦・陶磁器類が含まれる。

中部／上部間堆積層：灰オリブ色シルト質粘土および粗粒砂～細粒砂からなる池底堆積層である。平坦部では層厚30cm、斜面部分では薄くなり、T.P. +32.2mで尖滅する。

本盛土層からは、近世以降の瓦類が出土する。

中部盛土層：下位層の削剝斜面を覆う盛土層である。層厚は最大2.7mあり、堤の表土層直下まで達する。上半部は無層理であるが、下半部は層厚約10～50cmを単位とする盛土薄層が、ほぼ水平に累積する。本層には水成層は挟まれない。

本盛土層には染付磁器、平瓦が含まれる。

下部／中部間堆積層：灰オリブ砂質粘土からなる池底堆積層と、粗粒砂質シルトの斜面流出物とからなる。池底堆積層は平坦部では層厚40cm、斜面部分では薄くなり、T.P. +31.9mで尖滅する。前述したように、この池底堆積層はA西地区第5層およびA東地区第5層に偽礫として含まれる。

斜面流出物は下部盛土層上面の斜面に分布する。最大層厚は20cmあり、斜面下方で池底堆積層と指交する。出土遺物はない。

下部盛土層：段丘構成層を直接不整合で覆う灰オリーブ色砂質粘土層（水成）と、これと指交関係にあり、斜面堆積する盛土層とからなる。盛土層は層厚数cmから30cm前後の盛土薄層を単位とし、全層厚2.1m以上あり、標高T.P.+33.6mまで残存する。小池側は最上部盛土層に削剝されている。盛土層の傾斜は南西―北西方向であり、第14図西側の段丘構成層上面の傾斜と一致する。

一方、砂質粘土層は下位から上位へ徐々に分布高度を上げ、末端部は標高T.P.+31.4mから31.8mとなる。

下部盛土層からは、瓦器碗、插鉢、平瓦類が出土した。遺物の時期は瓦質插鉢からみて15世紀代と考えられる。

なお、本盛土層の基底面で、黒褐色粗砂粒砂質シルトを埋土とする土壌と溝が検出された。溝の方向は下部盛土層の走向方向と一致し、南東―北西方向である。これらの遺構埋土中には13世紀代の遺物がごく少量含まれる。

3. 各地区のいわゆる地山層層序

D地区（平井面）では、標準層序の模式地である原池低地から連続して、段丘構成層が分布する。また、段丘崖部分には、段丘構成層を不整合に覆って、古崖錐堆積物が分布する。

B・C地区のいわゆる地山層は2大別される。上部は軟質の赤色風化した砂質シルト層であり、層厚は平均20cmである。地山層の分布高所に残存する。下部はいわゆる虎斑をもつ水成ラミナが顕著な砂質シルト～シルト質砂層と、中～大礫を含む砂礫層～礫層からなり、整合一連である。層厚は4.7m以上ある。上部層と下部層とは不整合の関係にある。なお、上位の沖積層中から出土した旧石器は、上部の赤色風化砂質シルト層に由来した可能性がある。

A西地区とA池地区には砂質シルト層が分布し、下方へシルト質細粒砂～砂礫へ移行する。これらは整合一連の段丘構成層である。

A東地区のいわゆる地山層は不整合で2大別される。上部は明黄褐色～黄色の風化した砂・砂質シルトからなるA東地区第8層（古土壌）であり、層厚は10～20cmである。本層からはサヌカイト製剝片が1点出土した。下部は砂質シルト層・粘土層・砂礫層からなる段丘構成層であり、側方変化が極めて著しい。層厚は3.3m以上あり、分布高所では上面付近が赤色風化している。

本層の火山灰分析によれば、第8層に火山ガラスが包有され、吉川ほか(1986)⁽¹⁰⁾による平安神宮火山灰層(低位段丘層の上部層準)と、横大路火山灰土層(沖積層中部層準)のガラスに酷似する屈折率をもつガラスが混在している、とのことである(分析を依頼中)。

4. 出土遺物の年代観による分帯

(1)標準層序模式地(現池低地)

標準層序の模式地である原池低地における地層の大きな境界は、k層とk/l層間の非整合、p層(沖積層)とq層(古崖錐堆積物)間の不整合、および、q層と段丘構成層間の不整合である。

k層以上の地層から出土した遺物は、f層とf/g層間の層理面を境に2分され、上半部が近世以降、下半部には中世以前の年代観が与えられる。さらに、上半部は、近世前半までの遺物に限られるf層・e層と、近世～近代を示準するd層～b層、および主として昭和期に属するa層と第1層である。また下半部は、瓦質土器を指標とし、中世後半(室町時代～安土桃山時代)の遺物を含むf/g層～i層と、瓦器を指標とし、黒色土器を含むが瓦質土器は含まないj層～k層である。

k/l層～p層は出土遺物が古墳時代を示準するk/l層～l層と、弥生土器を出土するm層および無遺物層であるn層～p層に分けられる。

以上の出土遺物の年代観をもとにして、標準層序模式地における遺物包含層は、次の8帯に分帯される(第10図)。

I帯 : 現代を示準する第1層とa層とからなる。

II帯 : 近世後半から近代を示準するb層～d層からなる。

III帯 : 近世後半を示準するe層・f層からなる

IV帯 : 中世後半(室町時代～安土桃山時代)を示準するf/g層～i層からなる。

V帯 : 平安時代の要素を含み中世前半(鎌倉時代)を示準するj層・k層からなる。

VI帯 : 古墳時代を示準するk/l層～l層からなる。

VII帯 : 弥生時代を示準するm層とその下位の沖積層(n層～p層)を一括してVII帯とする。

VIII帯 : 土器を含まず、サヌカイト製剥片が出土したq層をVIII帯とする。旧石器時代を示準する可能性がある。

(2)D地区（平井面）～A東地区

前項と同様の手順で、各地区の層序を分帯した結果を、以下にまとめる。

i) D地区（平井面）

第1層と第1.5層は現代を示準する。

第2層と第3層は近世後半～近代を示準する。

第4層と第5層は近世前半以前を示準する。

第6層は中世を示準する。

第7層は中世前半を示準する。

第8層と第9層は古墳時代を示準する。

ii) B・C地区（平井面）

第1層と第2 a層は現代を示準する。

第2 b層と第3 a.b.c.d層は近世～近代を示準する。

第4層は中世を示準する。

第5層は平安時代を示準する。

第6層は古墳時代を示準する。

iii) A西地区（平井面）

第1層と第1.5層は現代を示準する。

第2層～第4層は近世後半～近代を示準する。

第5層と第6層は近世前半以前を示準する。

第7層は中世後半を示準する。

第8層は中世を示準する。

iv) A東地区（八田面）

第1層と第2層は現代を示準する。

第3層～第4層は近世後半～近代を示準する。

第5層と第6 a層は近世前半を示準する。

第6 b層と第6 c層は近世前半以前を示準し、中世後半に限られる可能性もある。

第7層は中世を示準する。

第8層は少なくとも旧石器時代を示準し、縄文時代にまで下る可能性がある。

v) A池地区（小阪谷）

A池地区の堤からは遺物の出土量が少なく、かつ2次的な移動を伴っているために、

遺物の年代観による分帯は困難であり、とりあえずの予察にとどめなければならない。

最上部盛土層は現代を示準する。

中部／上部間堆積層以上は、少なくとも近世以降を示準する。

中部盛土層は近世以降を示準する可能性がある。したがって、中部／下部間堆積層は中世後半から近世に位置づけられる可能性がある。

下部盛土層は中世後半を示準する可能性がある。

5. 地層の対比

本項では、分帯を手掛りとして、また、鍵層となる地層に着目して、各地区の層序を標準層序に対比する。

各地区の現代を示準する地層は、I帯（第1層・a層）に対比される。

D地区平井面の第2層・第3層、A西地区第2層～第4層、A東地区第3層・第4層は近世後半～近代を示準することにより、II帯（b～d層）に対比されることが考えられる。またA西地区第2層・第3a層と、B・C地区第2b層・第3a層とは、偽礫層と作土層からなり、特殊な遺構の形態が一致するので、それぞれ対比されることが考えられる。

D地区平井面第4層・第5層、A西地区第5層・第6層、A東地区第5層・第6a.b層はそれぞれが偽礫層と作土層からなり、近世前半を示準する。これらは、III帯（e層・f層）と層序・層相・遺構・年代観が一致するので、対比されることが考えられる。ただし、A東地区第6b層は偽礫層を挟む作土層からなり、A西地区の第6.5層（偽礫層）・第7層（作土層）とも層相が酷似するので、対比される可能性も考えられ、今後の課題として残される。

B・C地区の第3b.c.d層は、近世～近代を示準することにより、一括してII・III帯に対比されることが考えられる。

D地区平井面の第6層は、中世を示準し、中世前半を示準する第7層の上位にあるのでIV帯（f/g層～i層）に対比されることが考えられる。また、01-OX、82-OX、02-OX、03-OSなどの遺構埋土の層序・層相は前述したように共通しており、03-OSと模式地の100-OXとの連続関係から、各遺構埋土の層序は、100-OXの埋土層区分に対比されることが考えられる。すなわち、上位の偽礫層はf/g層に、中位の粘性のある砂質粘土層はg層に、下位の砂礫層あるいは偽礫層はh層に対比されることが考えられ、出土遺物の年代観も矛盾しない（詳細は後述）。

D地区平井面の第7層は、中世前半を示準することにより、V帯（j層・k層）に対比されると考えられる。

A西地区第6.5層～第8層は、中世を示準することにより、一括してIV・V帯に対比されると考えられる。そのうち上部の第6.5層・第7層が偽礫層と作土層からなる関係は、IV帯のf/g層とg層の関係に類似することにより、対比される可能性がある。

A東地区の第6c層・第7層は、中世を示準し、あるいはその可能性があるため、IV・V帯に一括して対比されると考えられる。

B・C地区の第4層は、中世を示準することから、IV・V帯に一括して対比されると考えられる。また、第5層の平安時代を示準する遺物は、j・k層にも含まれることから、第5層をとりあえずV帯に含めておく。

D地区平井面の第8層・第9層とB・C地区第6層とは、古墳時代を示準することからVI帯（k/l層・1層）に対比されると考えられる。また、D地区平井面の第8層・第9層は古墳時代を示準し、k/l層・1層の層相にそれぞれ酷似するので、対比されると考えられる。

A池地区の中部／下部間堆積層は、偽礫としてA西・A東地区の両第5層に含まれる。両地区の第5層と第6層とは整合であることから、中部／下部間堆積層は第6層に対比されると考えられる。すなわち、第6層（作土層）の同時異相と考えられる。したがって、中部盛土層は第5層に対比され、中部／下部間堆積層とともにIII帯に対比されると考えられる。その結果、下部盛土層は、A西地区の第6.5層以下のIV帯に対比されると考えられる。

下部盛土層に中世後半を支準する遺物が包含され、かつ2次的な堆積物であることを考慮すれば、IV帯の上半部に属すると考えられる。IV帯上半部にあるf/g層は偽礫層であるので、下部盛土層がf/g層に対比される可能性がある。

上部／中部堆積層と上部盛土層の模式地への対比の手掛りとなる遺物は少ない。ところでIII帯の上部にあたるe層に対比される各地区の層準が、全て偽礫層であること、IV帯の最上部にあたるf/g層に対比されるか、あるいは対比される可能性がある各地区の層準が偽礫層であることは、偽礫層の層準が特定の層準に顕著に現われることを示唆しているように思われる。この例を参考にすれば、A西地区とA東地区の両第5層（偽礫層）の上位にある偽礫層が、A西地区第2層・B・C地区第2b層・A東地区第3層であって対比されており、一方、A東・A西地区第5層に対比される中部盛土層の上位には上部盛土層

第1表 層序対比表（砂目は偽礫層を示す）

標準層序 (原池低地)	分 帯	D 地区 (平井面)	B・C 地区	A 西地区	A 池地区	A 東地区	時 代	
第1層	I 帯	第1層	第1層	第1層	最上部盛土層	第1層	現 代	
a層		第1.5層	a	第1.5層	・表土層	第2層		
b層	II 帯	第2層	第2層	b	第2層	上部盛土層	第3層	近 代
c層		第3層	a b	第3層	a b c	上部/中部間	a	
d層				c	第4層	堆 積 層	b	
e層		III 帯	第4層	第3層	d	第5層	中部盛土層	
f層	第5層		第6層			中部/下部間 堆 積 層	第6層	a b c
f/g層	IV 帯	偽礫層 砂質 粘土層	2263-00 埋土	第6.5層	下部盛土層	第6層	安土桃山	
g層		第6層	第4層	第7層	?	第7層	室 町	
h層		砂礫層		第8層				
i層		偽礫層						
j層	V 帯	第7層	第5層				鎌倉 平 安	
k層								
k/l層	VI 帯	第8層	第6層				古 墳	
l層		第9層						
m層	VII 帯						弥 生 ？	
n層								
o層								
p層								
q層	VIII 帯	古崖錐堆積物	赤色風化 砂質シルト層			第8層	後期旧石器	
段丘構成層		段丘構成層	段丘構成層	段丘構成層	段丘構成層	段丘構成層		

が重なることは、A西地区第2層・B・C地区第2b層・A東地区第3層と上部盛土層とが対比されると予想させる。

したがって、上部/中部間堆積層はIII帯の下半部に対比される可能性がある。これらの可能性に対して、出土遺物の年代観に矛盾はない。

各地区で段丘構成層と呼んだ地層は、検出上面が全調査地に連続している。また、層相変化が著しいものの、調査範囲においてはその中に不整合が認められない。したがって、模式地における段丘構成層と同じ地層であると考えられる。

A東地区の第8層は縄文時代を含む可能性があるが、上位層とは不整合であることからとりあえず、Ⅷ帯（q層、古崖錐堆積物）に対比しておく。同様に、B・C地区の赤色風化砂質シルトもⅧ帯に対比しておく。

以上に述べた地層の対比を、第1表にまとめておく。 (趙)

註

1. 日下雅義・原 秀禎・高橋 学・高島新治・外山修一・山川雅裕（1980）「泉北丘陵および周辺部の地理的環境と遺跡の立地」大阪府立泉北考古資料館編、『陶邑』Ⅴ、大阪府文化財調査報告書、第33輯、9-28p. 大阪府教育委員会
2. 古環境研究会（1982）「鈴の宮遺跡付近の地理環境」堺市教育委員会編（1984）、『鈴の宮』Ⅳ、堺市文化財調査報告書、第17集、付載、52-78p.
3. 前葉和子（1984）石津川流域の「地形分類」図。大阪文化財センター編、府道松原東大津線関連遺跡発掘調査報告Ⅰ、9p.
4. 市原 実（1984）「近畿の丘陵」特集『海成粘土と硫化物』、アーバンクボタ、no.23、44-47p. 久保田鉄工株式会社.
5. 市原 実・市川浩一郎・山田直利（1986）地域地質研究報告（5万分の1図幅）『岸和田地域の地質』148p. 地質調査所
6. 藤田和夫・前田保夫（1985）地域地質研究報告（5万分の1図幅）『大阪西南部地域の地質』103p. 地質調査所
7. 日本道路公団大阪建設局大阪工事事務所（1987）近畿自動車道東八田～桧尾間第2次土質調査報告書.
8. 角 靖夫（1970）「粒度区分尺度」地学団体研究会地学事典編集委員会編、『地学事典』、1156-1157p. 平凡社.
9. 趙 哲济（1983）「遺構検出面の便宜的な呼称」大阪市文化財協会編、大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告、Ⅲ、31-33p.
10. 吉川周作・那須孝悌・樽野博幸・古谷正和（1986）「近畿地方に分布する後期更新世～完新世の火山灰層について」地球科学、40巻1号、18-38p.

第4章 遺 構

第1節 概 要

平井遺跡は、石津川右岸、標高31～35m前後の段丘と鴨坂池、芦池、小池などの溜池や原池斜面の低湿地からなる。検出遺構の種類も豊富で、自然流路、掘立柱建物、溝、土壌窯、水田址など豊富である。

遺物は旧石器時代から存在するが、遺構は古墳時代後期まで存在しない。この時期にはB・C地区の段丘上の凹地を流れる自然流路や原池低湿地の谷地形がある。

また、B・C・D地区の中世包含層中に数多く含まれる古墳時代後期の須恵器やC・D地区に多い窯体片の存在などは、段丘上や原池斜面に遺構が存在する可能性を示す。

平安時代中期後半には、B・C地区に2ヶ所集中して、掘立柱建物や土壌などが出現する。この時期は、B・C地区を流れていた古墳時代後期の凹地を平坦化する目的で、整地がおこなわれているが、C地区にはこの傾向が著しい。

鎌倉時代の12世紀末から13世紀前半にかけては、本遺跡が最も盛期をもつ時期で、A西地区からD地区にかけて展開する段丘上に掘立柱建物や溝、土壌などによって構成され、いくつかの単位をもつ「村」が成立する。この集落は、柱穴の切り合いや出土遺物からみて極く単期間に成立、廃絶したものと考えられる。この集落には注目すべき遺構として、瓦器窯が存在する。この時期以降、本遺跡内では集落は検出されない。

15～16世紀にかけては、C・D地区にかけて大規模な溝や淵などの水利施設がつけられる。これら一連の水利施設が埋没して以降、本遺跡は水田化、或いは畑などにつくられ、現代に至る。

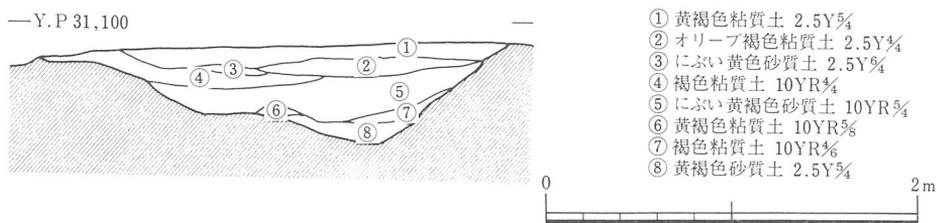
(渋谷)

第2節 古墳時代後期

1. B・C地区

B・C-76-OS (第15・30図)

本調査区は、石津川右岸の中段段丘上に位置し、調査区北側には、石津川のつくる低地から派生した開折谷が東から西の方向に入り込んでいる。今回の調査で、C地区の東端からB地区の西端をかすめる形で北西から南東方向にのびる小さな谷筋を検出した。この谷は調査区北側に存在する開折谷に至るものと考えられる。C-76-OSは、この谷の中央



第15図 C地区76-O S土層断面図

を蛇行しながら、谷筋に沿って流れる自然流路である。自然流路の幅は4.6mを測り、深さは西端が0.86m、東に向うに従い浅くなり、東端では0.1mを測る。自然流路内埋土は、西側で8層に分層でき、両側から流れ込んだ堆積を示す。東側では1層である。西側最下層から須恵器が少量出土した。谷の埋土は1層で、この埋土中から黒色土器片が多数出土し、平安時代中期に谷は埋没したものと考えられる。(小谷)

2. D地区

谷地形

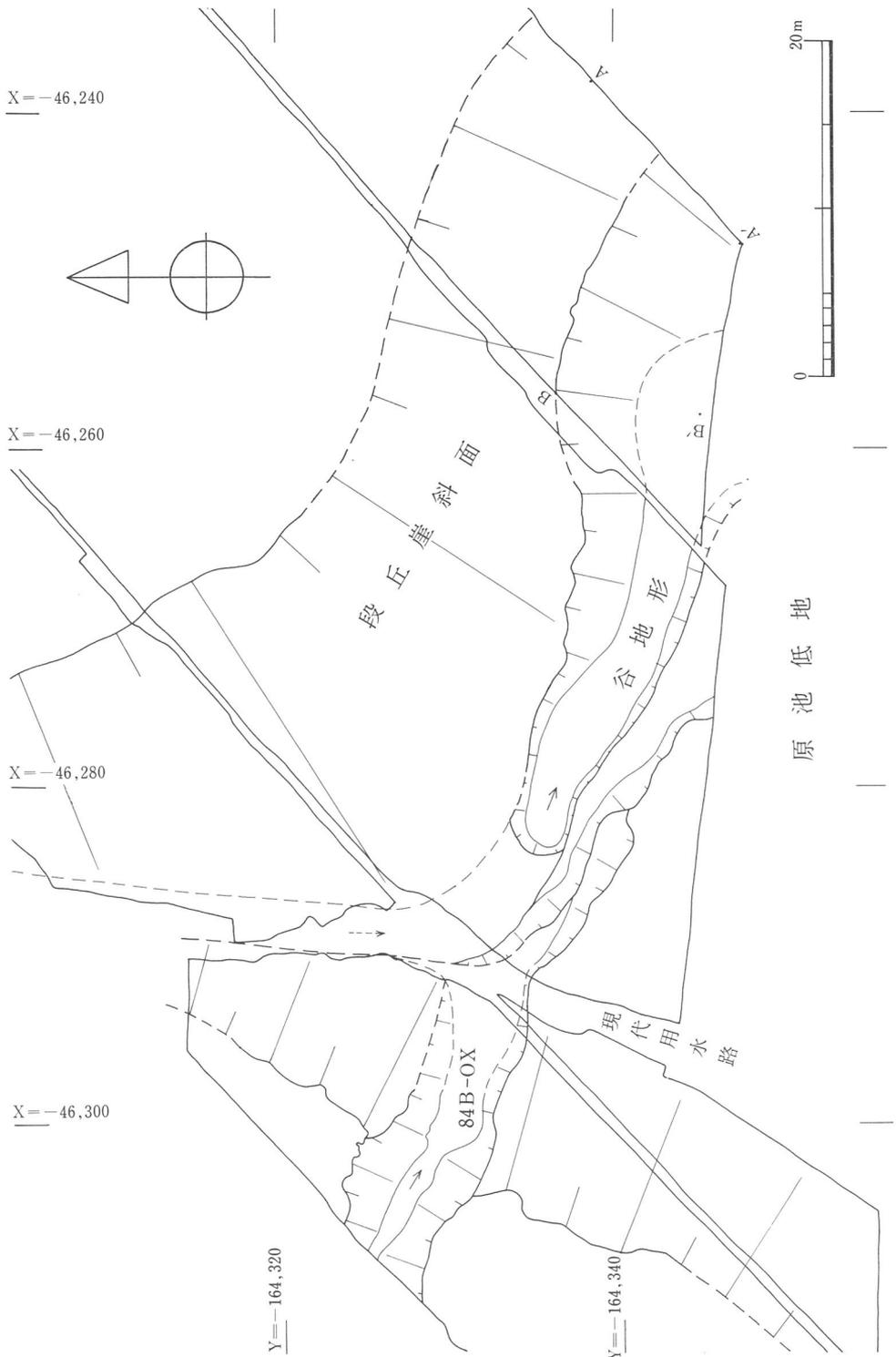
原池低地に埋没する谷地形である(第16・17図)。

現在の段丘崖にそって西北西-東南東方向に延びるが、下流域の低地南東部で南の原池方向に開口する傾向がある。また上流側では現代用水路に沿って北上し、III・IV区間を長崎屋方面へ延びていたと考えられる。

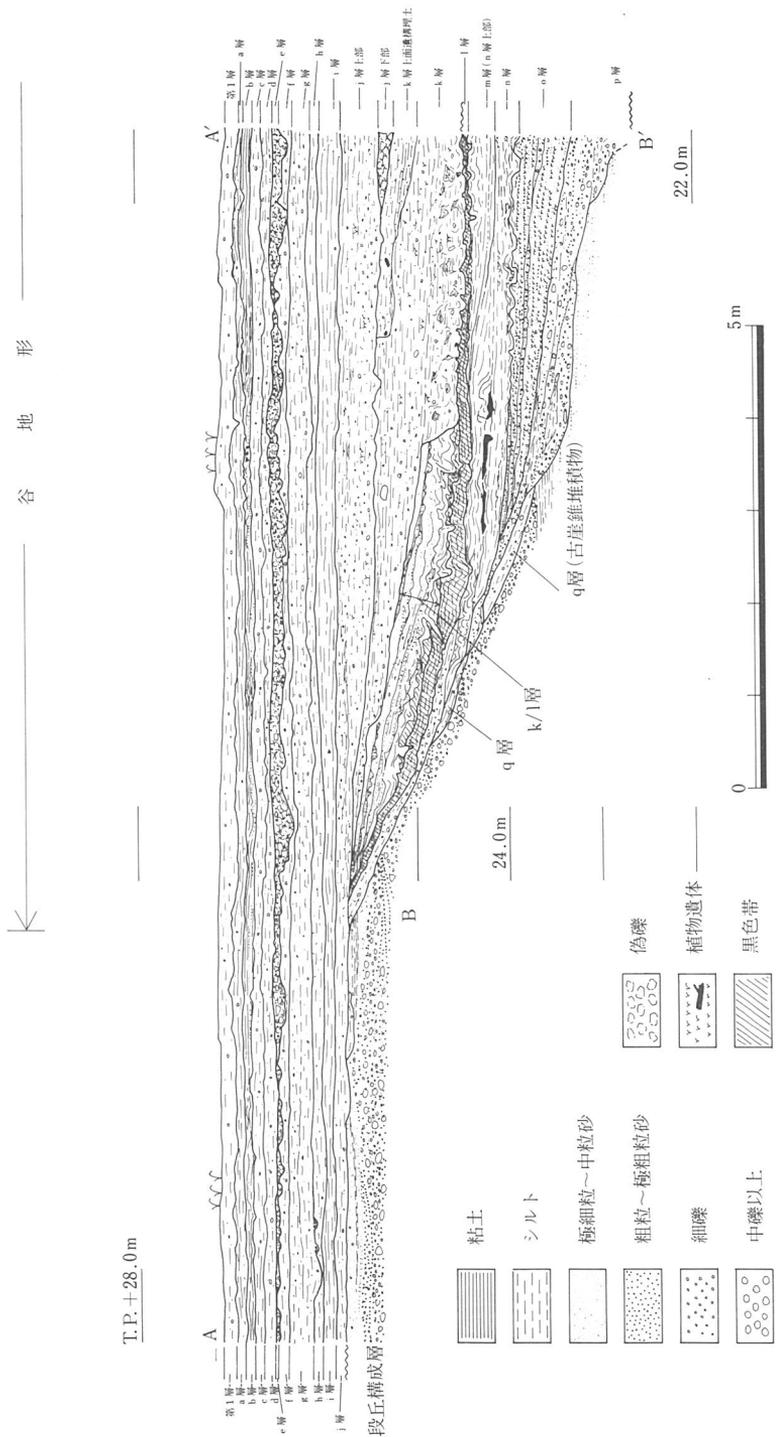
この谷地形は標準層序のk層およびj層基底面で検出された。谷幅は低地中央部で約7m、深さ1~2mであるが、開口部と考えられる東南部では谷幅の推定20m、深さ約3mとなる。なお、検出面は非整合面であり、j層下面で広く削平を受けていることにより、かつての地形は著しく損われていると判断される。第12図からは、本谷地形の北斜面は、後述するD-100-OX上端の段丘崖頭付近から連続する地形であったと推定されるので、第16図には、段丘崖斜面の連続面として復元した。

本谷地形を埋積する地層は、標準層序のp層~k/l層である(第17図)。いずれも斜面部分でアバットないしオーバーラップし、谷中央部で水平堆積している。p層~n層が無遺物層であり、また弥生土器と須恵器を含むm層~k/l層に乱堆積こそあれ、遺構や足跡等の人為的な働きかけの証拠が認められないことから、自然の営力によって埋積されたものと考えられる。埋積作用は、遅くとも弥生時代中期には始まっていた。

なお、p層下面の不整合面下を構成するq層(古崖錐堆積物)の分布が、推定される谷



第16図 D地区 遺構平面図 (古墳時代以前)



第17図 原池低地地質断面図 (断面位置は第16図を参照)

地形北斜面に沿っていることは、この谷地形の前身の斜面の存在を推定させる。したがって、本地形の前身は、旧石器時代に遡る可能性がある。

2. 小谷D-84B-OX

前述の谷地形から分枝すると推定されるごく浅い小谷である。V区の平井面第7層基底面で検出され、西北西-東南東方向に延びる(第16図)。各幅は最大で約7m、深さは0.4m+である。検出長は約10mであり、上流側は調査地外に延び、下流側はIV/V区間斜面に削られる。埋積層は2分され、上部が平井面第8層、下部が第9層であり、前述したように、それぞれ、標準層序のk/1層、k層に対比される(第12、13図)。上部層には須恵器の小破片が包含される。谷地形(前出)と同様に、埋積層中には人為的な働きかけが認められないので、古墳時代に主として自然の営力によって堆積したと考えられる。(趙)

第3節 平安時代中期

1. B地区

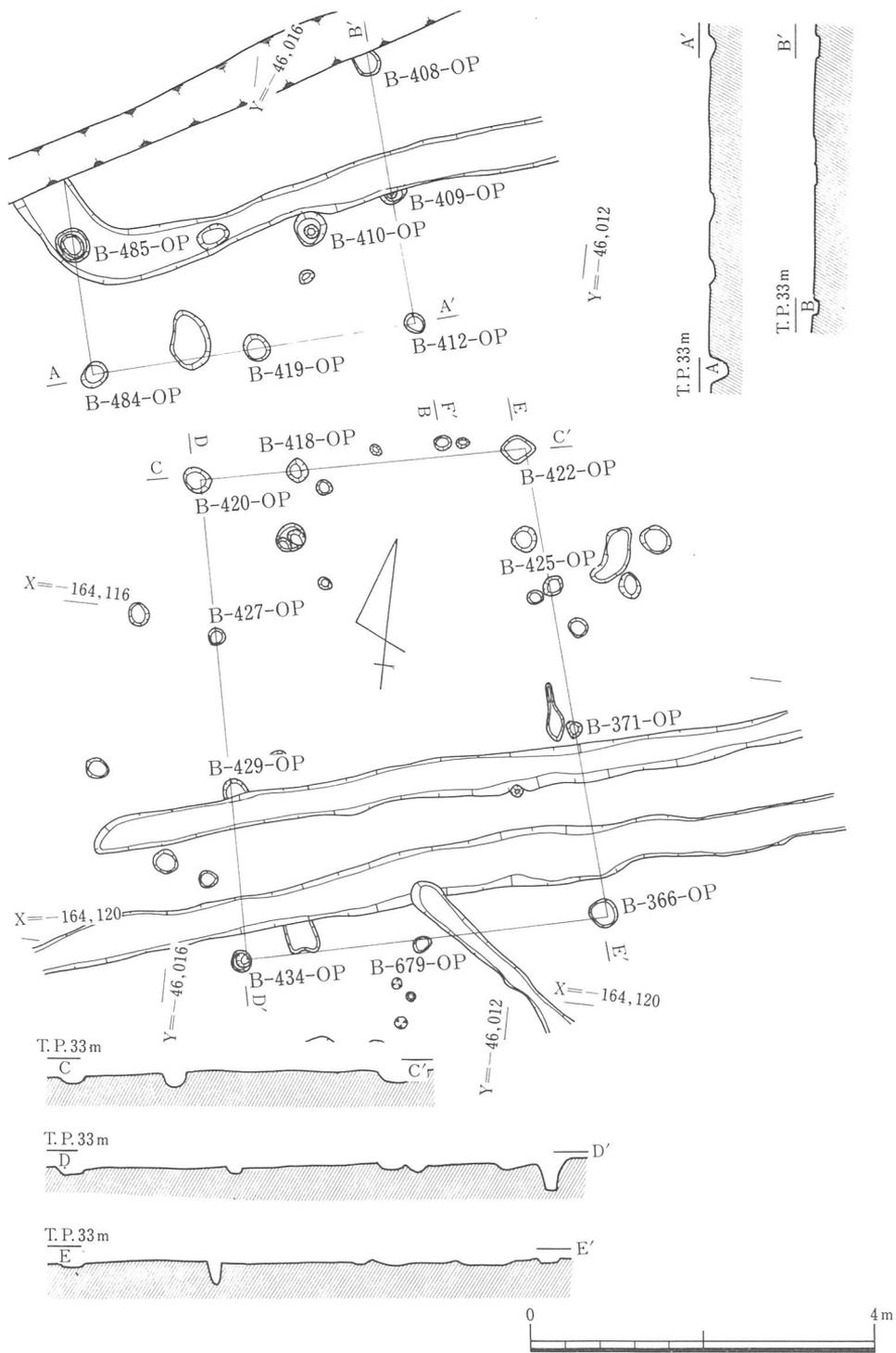
a. 掘立柱建物、ピット群

B-1-OB (第18図)

B地区のほぼ中央、北端で検出した掘立柱建物である。北側半部は調査区外に及んでおり全容は明らかではない。B-408、409、412、419、484、485-OPによって構成され、南側柱2間、西側柱1間、東側柱2間を確認した。柱穴間隔は、南北1.5m、東西2.3mを測る。柱穴は直径26~40cmの不整円形で、深さは15~35cmを測り、柱穴埋土は灰褐色粘質土(10YR5/2)、遺物は南側柱中央のB-419-OPから黒色土器の小片が出土した。

B-2-OB (第18図)

B地区のほぼ中央北寄りで検出した掘立柱建物が推測できる遺構である。B-420、418、422、425、371、366、679、434、429、427-OPによって構成されることが考えられる。B-1-OBとは約1.3mの間隔をあけて南に位置する。3間×2間の南北棟と推定されるが、北側柱穴間隔は不規則である。柱穴間隔は1.7~2.2mと不規則で、柱穴は17~30cmの不整円形で、深さは12~32cmを測る。柱穴内埋土は、灰褐色粘質土(10YR5/2)、遺物は南側柱東端の366-OPから黒色土器、土師器の甕、小皿、羽釜が重なるような状態で出土している。この柱穴は地鎮の可能性が考えられる。



第18图 B地区 1、2—OB平面、断面图

B-384-O O (第30図)

B地区中央北寄りで検出した土壌である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径1.0m、短径0.65m、深さ8cmを測る。埋土は灰褐色粘質土(10YR5/2)である。遺物は黑色土器が出土した。

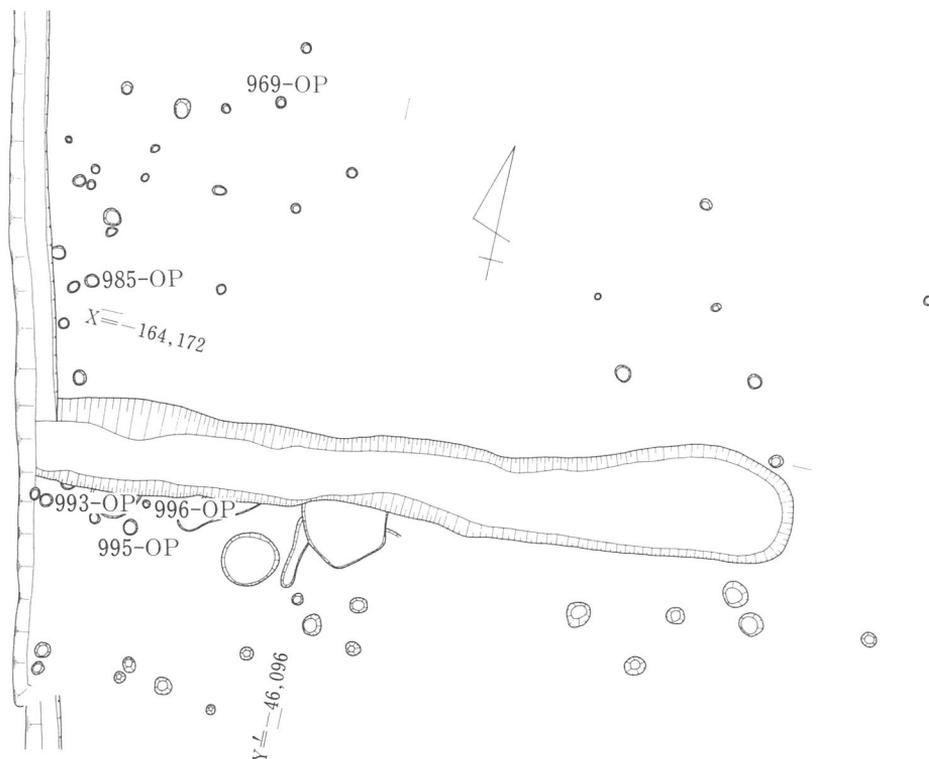
ピット群4 (第30図)

調査区西端には直径15~40cm、深さ5~30cm程度のピットがある。出土遺物は969、985、993、995、996-O Pから黑色土器の小破片が出土した。ピット群4は平安時代中期になるものと考えられる。

b. 土壌

B-2265-O O (第24、30図)

B地区西端、C-76-OSの東側で検出した土壌である。平面プランは不整形な楕円形を呈し、長径3.5m、短径2.4m、深さ28cmを測る。埋土は灰褐色粘質土(10YR5/2)1層である。遺物は、黑色土器に混り、須恵器の甕、甍が出土した。



第19図 B地区ピット群4平面図

2. C地区

a. 掘立柱建物

C-1-OB (第21図)

C地区南西端で検出した掘立柱建物である。C-320、332、334、340、324、329、372、337、339、343、354-OPによって構成され、南側柱中央の柱穴は確認できなかったが、3間×2間の建物が推定できる。建物方位はN-9°-Eである。寸法は南北6.3m、東西4.3mを測り、柱穴間隔は2.0~2.2m、柱穴は直径30~35cmの円形で、深さ20~28cmである。柱穴内埋土は黄褐色粘質土である。出土遺物はC-337-OPから黒色土器片が出土した。

C-2-OB (第21図)

C地区西南端で検出した掘立柱建物で、C-1-OBとは3.4mの間隔をあけ東に位置する。C-349、350、288、386、419、433、430、425、441、306、301、299、424、421-OPにより構成され、北西端の柱穴は確認できなかったものの2間×5間の建物が推定できる。建物方位はN-92°-Wである。寸法は東西10.9m、南北4.3mを測り、柱穴間隔は1.6~1.9m、柱穴は22~40cm、深さ10~52cmを測る。柱穴内埋土は黄褐色粘質土である。遺物は出土しなかったが、柱穴内埋土はC-1-OBと同じであるため、同時期と考えられる。

C-3-OB (第23図)

C地区西端で検出した掘立柱建物である。南側は調査区外にのびるため全容は明らかでないが、C-53、58、65、60、64、63-OPによって構成される。また、C-52、56、66-OPは底になるものと推定される。北側柱2間、東側柱2間を確認した。北側柱穴間は1.6m、東側柱穴間は1.4mを測る。柱穴は30cmの円形もしくは、楕円形で深さは20~52cmである。遺物は出土しなかったため時期は不明であるが、建物方位、規模からみて、1.2-OBと同時期になるものと考えられる。

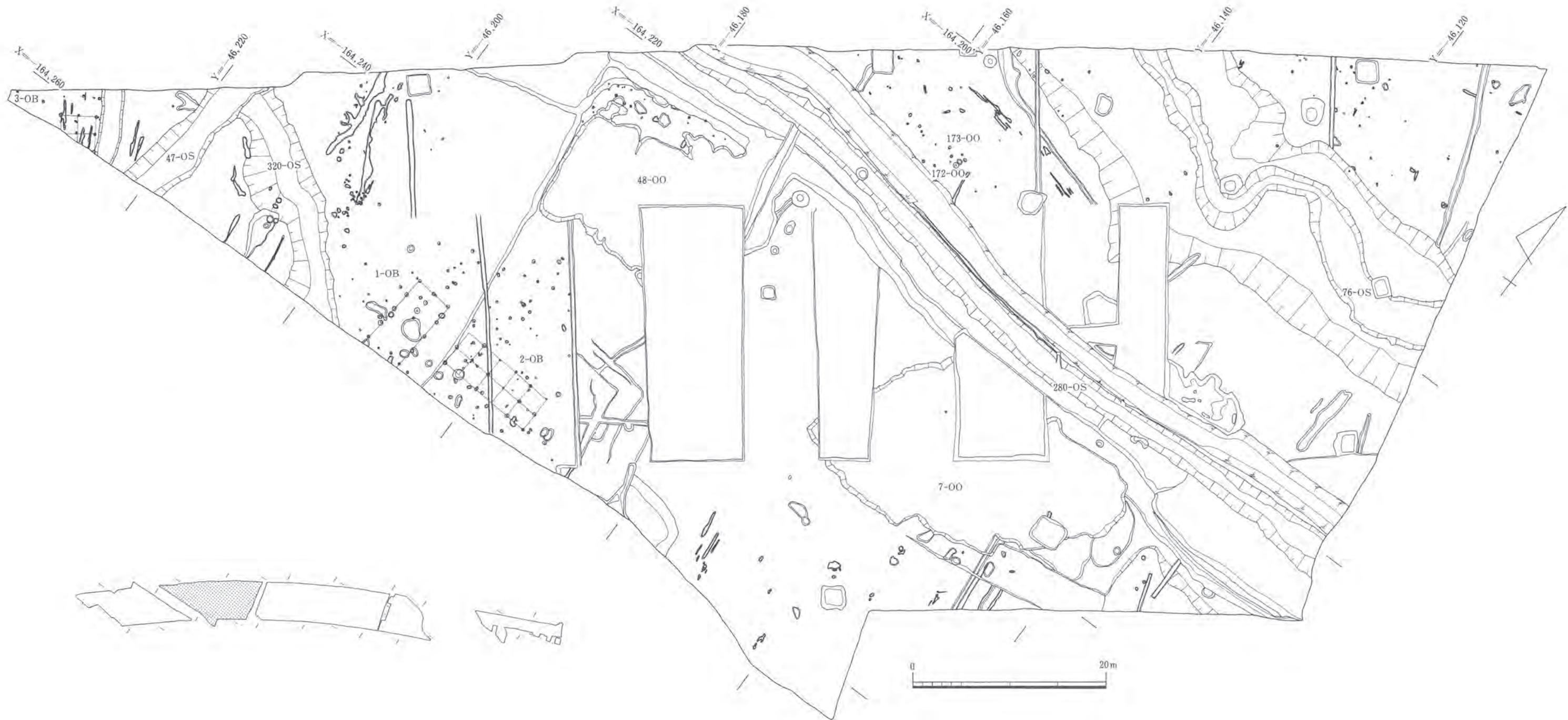
b. 土壌、溝

C-172-OO (第20図)

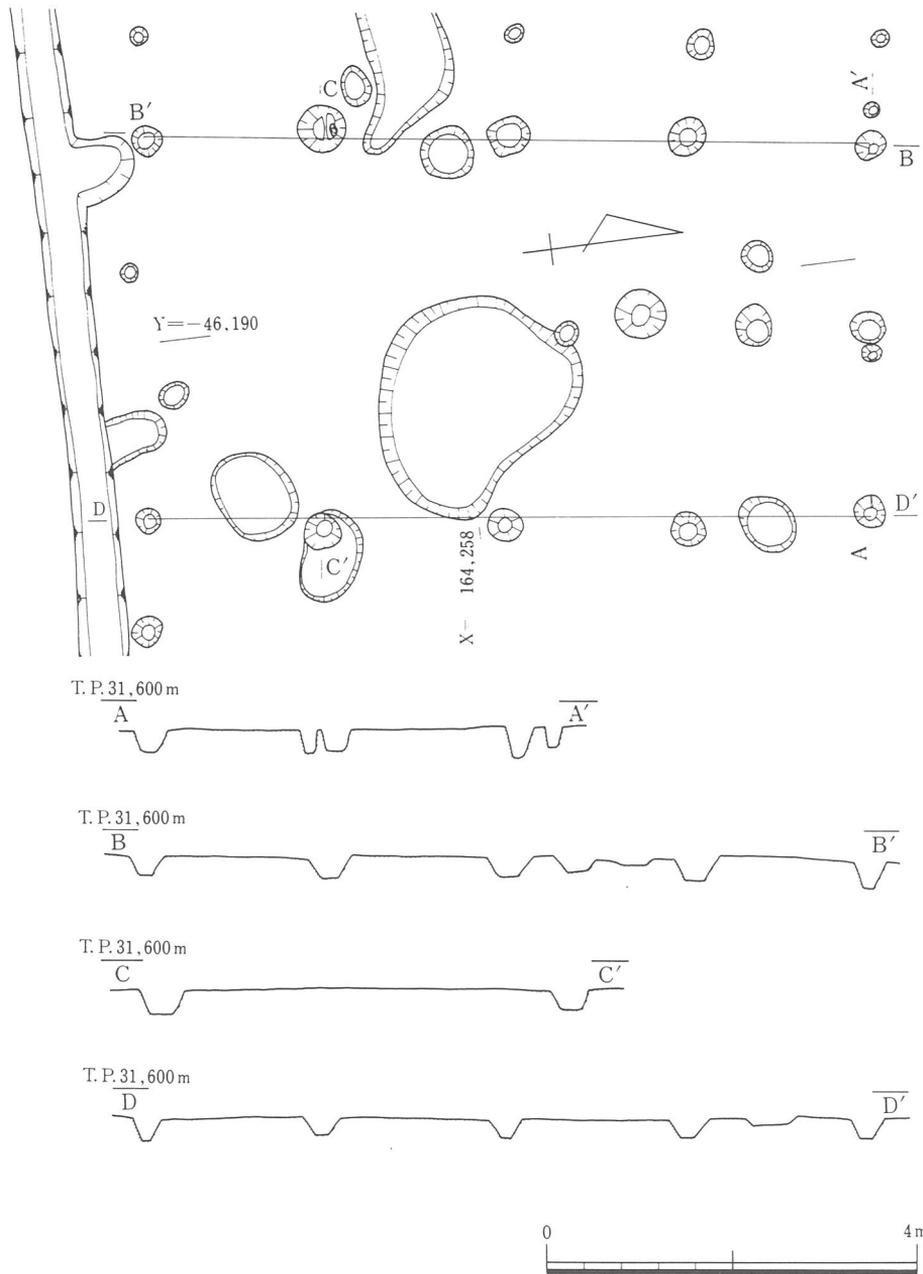
C地区北東、C-76-OSの西側で検出した土壌である。平面プランは不整形円形を呈し、直径60cm、深さ27cmを測る。出土遺物は黒色土器、土師器が出土した。

C-173-OO (第20図)

C地区北東、C-76-OSの西側で検出した土壌である。直径5.5cm、深さ8.5cmを測る。



第20图 C地区 全体图

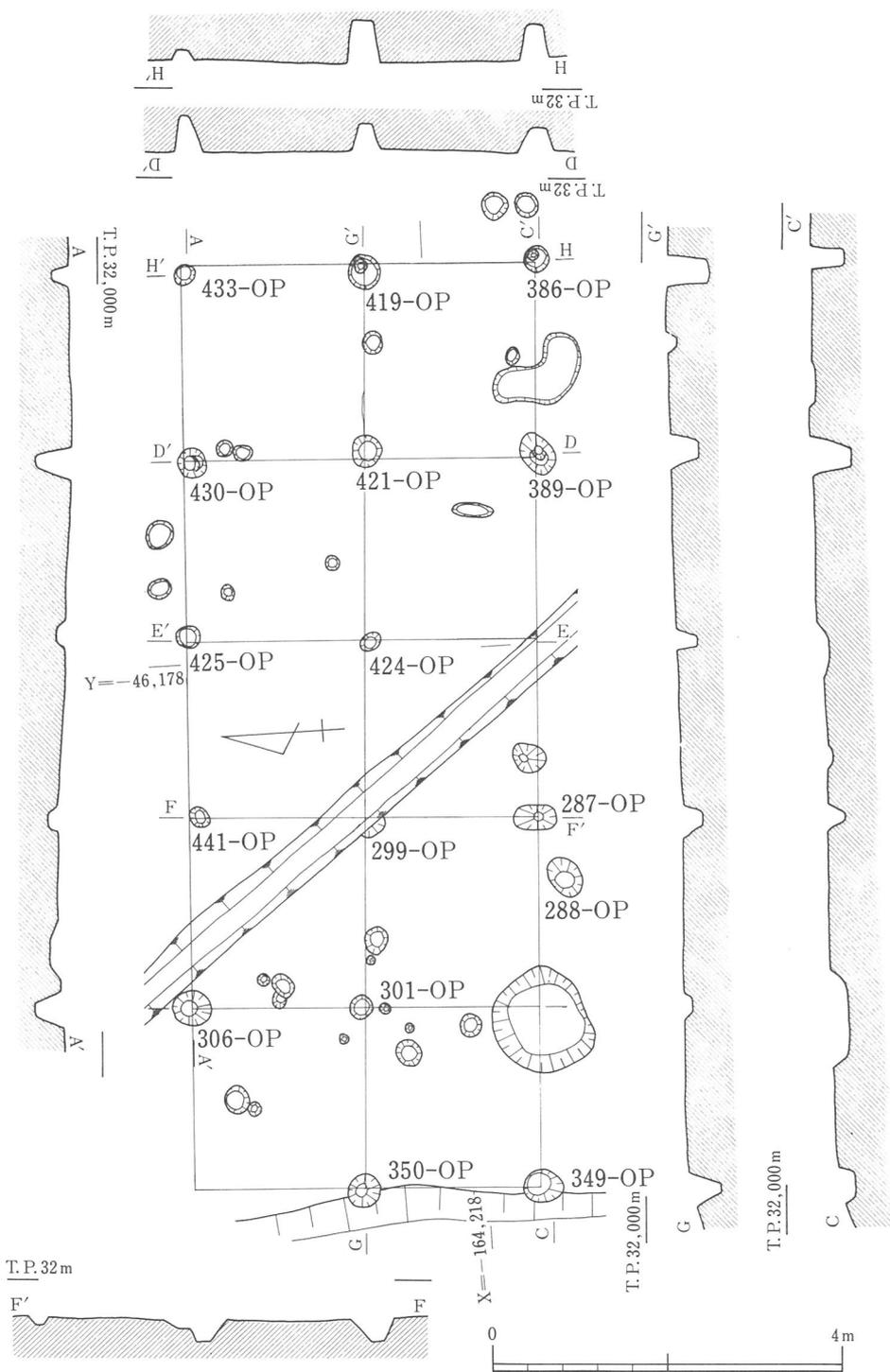


第21図 C地区1-O B平面・断面図

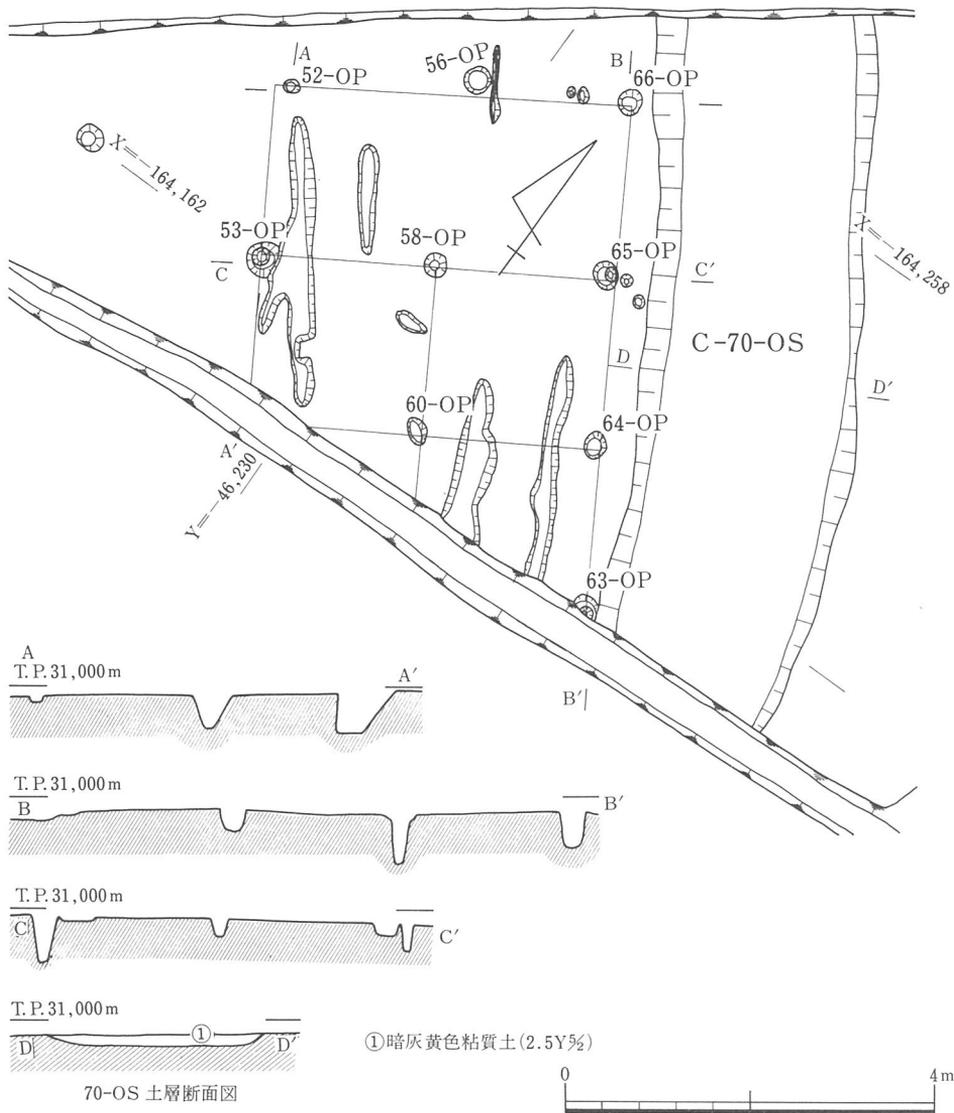
南西の肩を173-00により切られる。出土遺物は黒色土器、土師器が出土した。

C-291-00 (第20図)

C地区南西端で検出した土壌である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径1.0m、



第22图 C地区 2-OB平面、断面图

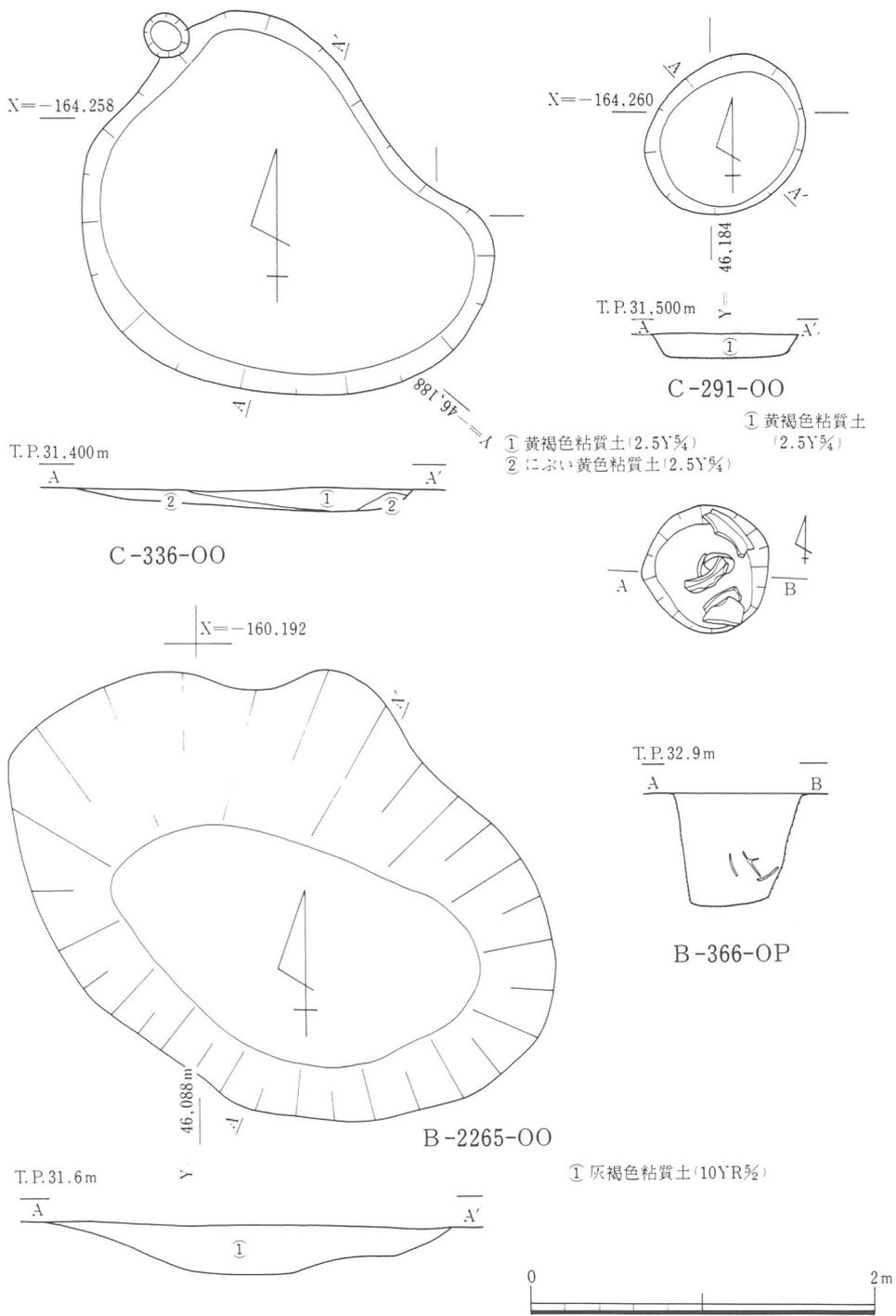


第23図 C地区3-OB平面・断面図

短径0.85m、深さ0.5mを測る。埋土は黄褐色粘質土（2.5Y5/4）である。遺物は、黒色土器が出土した。

C-336-O O（第20図）

C地区南西端で検出した土場で、C-291-O Oとは約3.8mの間隔をあげ西に位置する。土場の北側一部をC-335-O Pにより切られている。平面プランは不整形な楕円形を呈し、規模は長径2.4m、短径1.96m、深さ19cmを測る。埋土は、2層に分層できる。遺物



第24図 B・C地区 土壌、ピット群平面、断面図

は黒色土器の小片が出土した。

C-70-O S (第20図)

C地区西端、3-O Bの東で検出した溝である。検出長7.6m、幅2.5m、深さ12cmを測る。溝内埋土は1層である。遺物は出土しなかった。(小谷)

第4節 鎌倉時代

1. A西地区

鎌倉時代は中心となる時期であり、遺構の最も稠密に存在する段階である。

大きくとらえれば3ヶ所のピットの集中が認められ、それぞれが建物群を構成するものと考えられる。また、それらを隔てるように南西-北東方向の溝が構築されている。ピット群の内部および周囲には多数の土壌があり、焼土塊や土器を多く含んでいる。

建物群=屋敷地の出現は13世紀前半で、13世紀代に盛期があるが、一部14世紀代以降も存続が認められる。

遺構の検出は地山面であり、基本的には第8層の包含層の下となっているが、第8層が削平された部分では第1層、第4層の基底となっている。(宮野)

a. 掘立柱建物、柵、ピット群

A西-01-O B (第26図)

中央部西寄り検出した2間×3間の総柱の建物である。桁行8.8m、梁間3.5mの東西棟であるが、北西側のみ1間分の張出し部をもち、東側には庇が設けられている。南北主軸方向はN-3°-Wで、柱間距離は桁行で2.3~2.5m、梁間で1.7~1.8m(庇部は1.65m)を測る。柱掘形は径20~40cmの平面円形を呈し、深さは15~30cmと一定しないが、底面高はほぼ水平にそろえられている。A西-416・443-O Pは東柱もしくは入口に関係するピットと考えられる。柱穴内の埋土は基本的に褐色の粘質シルトで、A西-410~413・442・505・677-O Pには径20cm前後の柱痕が認められる。各柱穴内からは13世紀前半と考えられる土器が比較的多く出土し、建物の時期を示唆する。(岡本)

A西-02-O B (第27図)

中央部西寄り、A西-01-O Bの南側で検出した2間×2間の建物である。桁行4.6m、梁間4.1mの南北棟である。南北主軸方向はN-2°-WでA西-01-O Bとはほぼ同じである。柱間距離は、桁行で2.5mと2.1m、梁間で2.05mを測る。柱掘形は基本的に径20~30

cmの平面円形を呈するが、A西-393-OPは25×50cmの楕円形を呈する。深さは20cm前後を測り、しかも底面高もほぼ水平にそろえられている。A西-403・423-OPは入口に関係するピットとも考えられる。柱穴内埋土は褐色を基調とした粘質のシルトで、径15～20cmの柱痕が観察されるものもあり、A西-404-OPには根石がすえられていた。柱穴内からは13世紀前半の瓦器碗・土師器皿等が少量出土する。 (岡本)

A西-03-OB (第28図)

調査区北東域のピット群中において確認した掘立柱建物で、柱穴底に根石を有することから復原することができた。

根石を有する柱穴は71・77・88・97-OPで、55-OPには存在しないが、位置と規模から想定したものである。ほぼ東西-南北の方向を示しており、東西方向が梁行方向になろう。従って、検出状況では梁間2間、桁行1間以上である。梁間1間は約2.5m、桁行1間は約3.5mを測る。柱穴プランは不整円形～不整楕円形で一様ではない。平面規模は最も大きい55-OPが62cm×28cmを測る。深度も18cm～50cmとばらつきがある。

根石には自然円礫を使用しているが、88-OPのみ平瓦を使用している。 (宮野)

A西-ピット群1 (第25図)

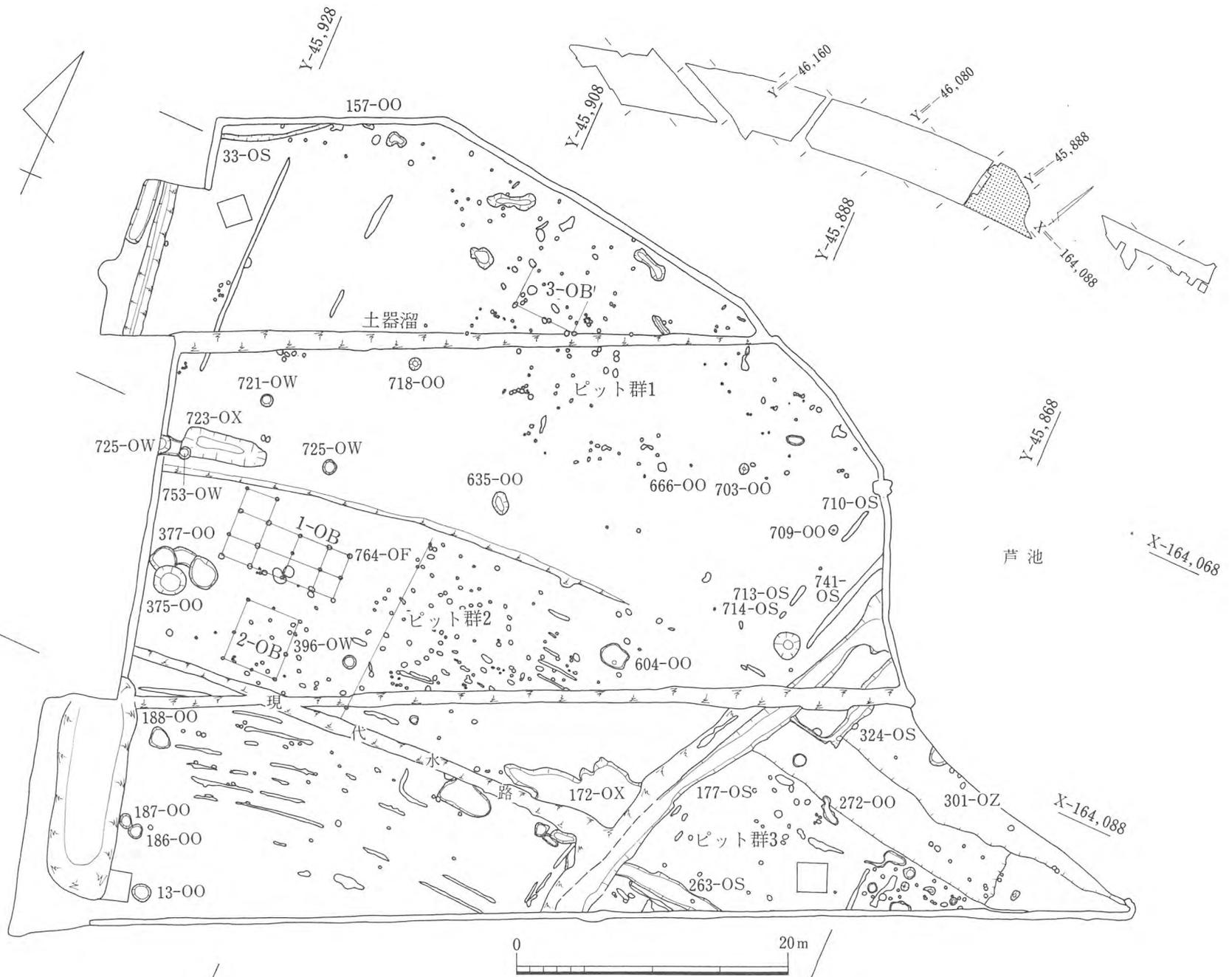
A西区の調査範囲の中では、地山面検出の遺構のうちピットの集中する地区が3ヶ所見られる。これを北からピット群1～3とする。

ピット群1は03-OBの含まれるもので、調査区北東域に存在する。ピットの数は少ないが、配置からみると建物の重複が想定できる。土壌も数基存在するが、ピット(建物)との関係は明確ではない。

ピット群1の西側には全く遺構の存在しない空間があり、東側も希薄となっている。ピットの深度から判断すると削平によって完全に削られていることは考えがたく、やはり本来から遺構の存在しない地区であったと思われる。 (宮野)

A西-ピット群2 (第25図)

中央部南寄り、A西-764-OFの東側で検出した。厳密にはA西-02・03-OB等の建物のピット群もこれに含まれるであろう。しかし、A西-764-OFより東側で検出されたピット群は、一部を除いて大半が柱穴とは考え難く、むしろ自然地形に伴うものである。基本的には径20～40cmの平面円形を呈し、深さは5～20cmと一定しない。埋土は、時期差によるためか褐色の粘質シルトのものと淡褐色の砂質シルトのものに大別でき、前者からは13世紀代と考えられる瓦器片や土師器片が少量出土する。 (岡本)



第25図 A西地区 遺構平面図

A西-ピット群3 (第25図)

177-OSの東側に展開するものである。細かく見れば西側の一群と、東側の稠密な一群に分けることができる。

西側の一群では、明確な根拠がないため建物の想定復原を避けたが、配置からみると03-OBと同じ東西-南北を向く建物の存在を想定することは可能である。また、ピットの北側には複数の土壌が存在している。

東側の一群は、多数の土壌とピット、そして溝を重複した状況で検出した。ここでも判断の根拠がないため建物を復原しなかったが、数回の建替えは想定できよう。ピットのうちのひとつには、03-OBでの88-OPと同様に平瓦を底面に置いたものがあり、ほぼ同時期の構築と考えてよからう。

ピット群3のピットの中には埋土中に瓦質土器を含むものがあり、すべてを鎌倉時代とするわけにはいかない。ただ、量的にはわずかであり、盛期は鎌倉時代(13世紀代)に求められよう。

(宮野)

A西-764-OF (第27図)

中央部で検出した南北方向の柵列である。総延長約13mを検出し、主軸方向はN-3°-Eである。柱間距離は2.7m(9尺)であるが、A西-444-OPとA西-459-OP間は1.5m(5尺)と短く、入口的な施設があった可能性が考えられる。柱掘形は径20~30cmの平面円形を呈し、深さは検出面からそれぞれ10cm前後を測る。柱穴内の埋土は褐色の粘質シルトで、A西-482・501-OPには径10~15cmの柱痕が観察される。遺物は出土しなかったが柱穴内の埋土がA西-02・03-OBとほぼ同じであることから、これら建物と同時期と考えられ、両建物が存在する屋敷地の東限を画する柵列であろう。

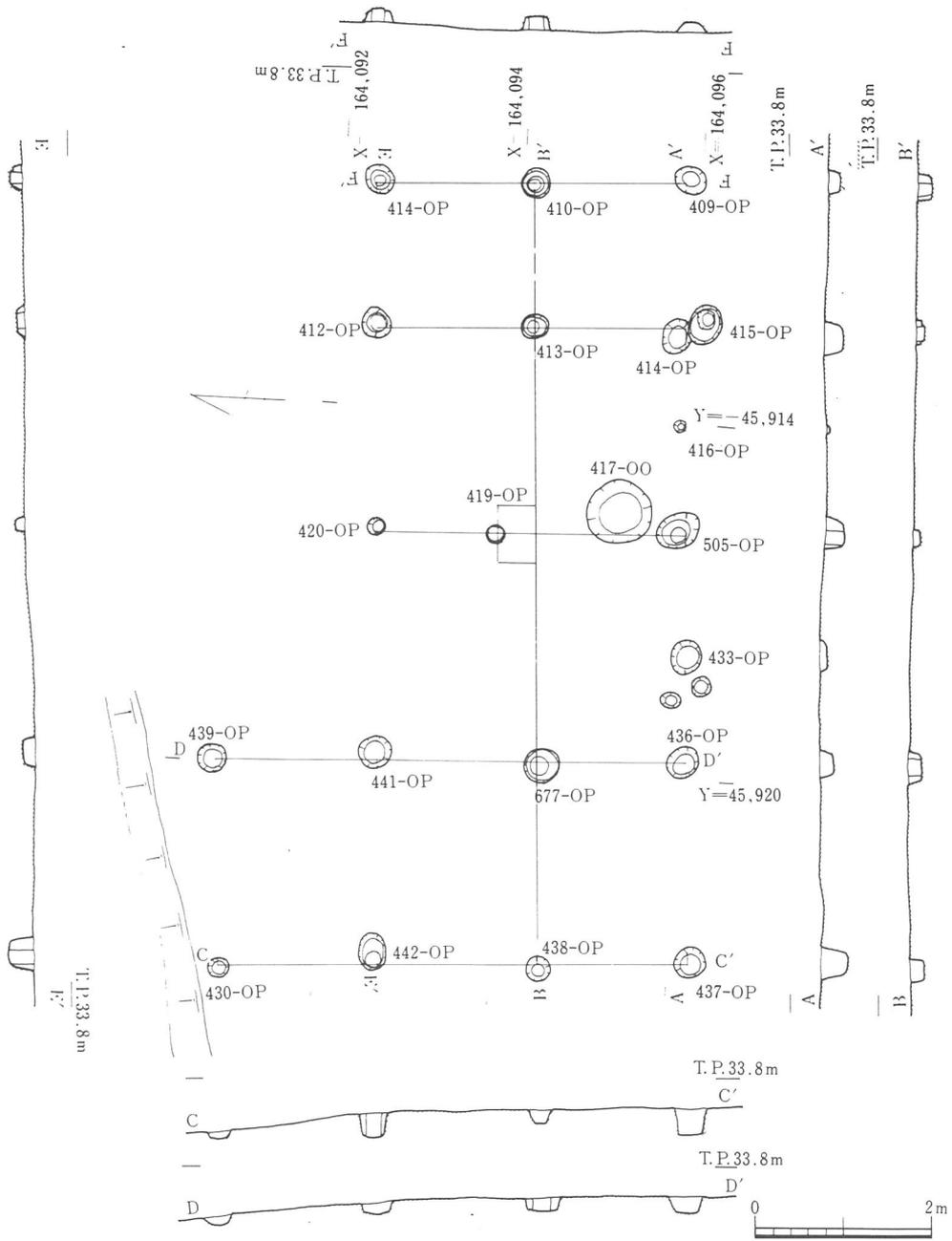
(岡本)

b. 土壌

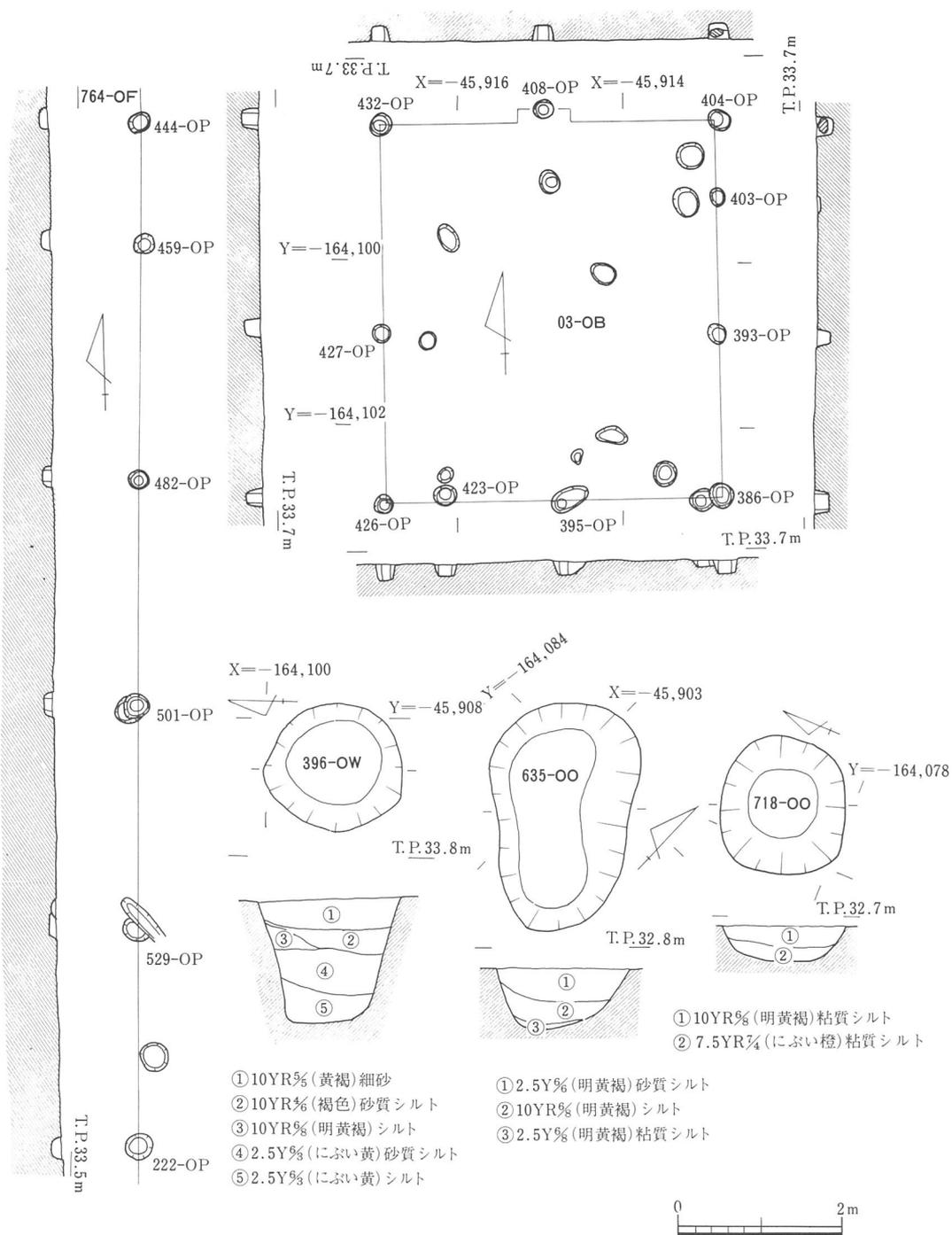
A西-土器溜 (第29図)

ピット群1とピット群2の間の包含層(第8層)中に多量の土器片を混入している部分が存在した。破片には比較的大形のもので原形を残すものもあったため遺構としての平面プランの確認に努めたが、最終的に地山面まで下げて確認が得られず、地山面の掘り込みも検出できなかった。集中する範囲は1m四方ほどで、土器についても整理の結果完形に近いものが数点復元できたため土器溜として報告するものである。

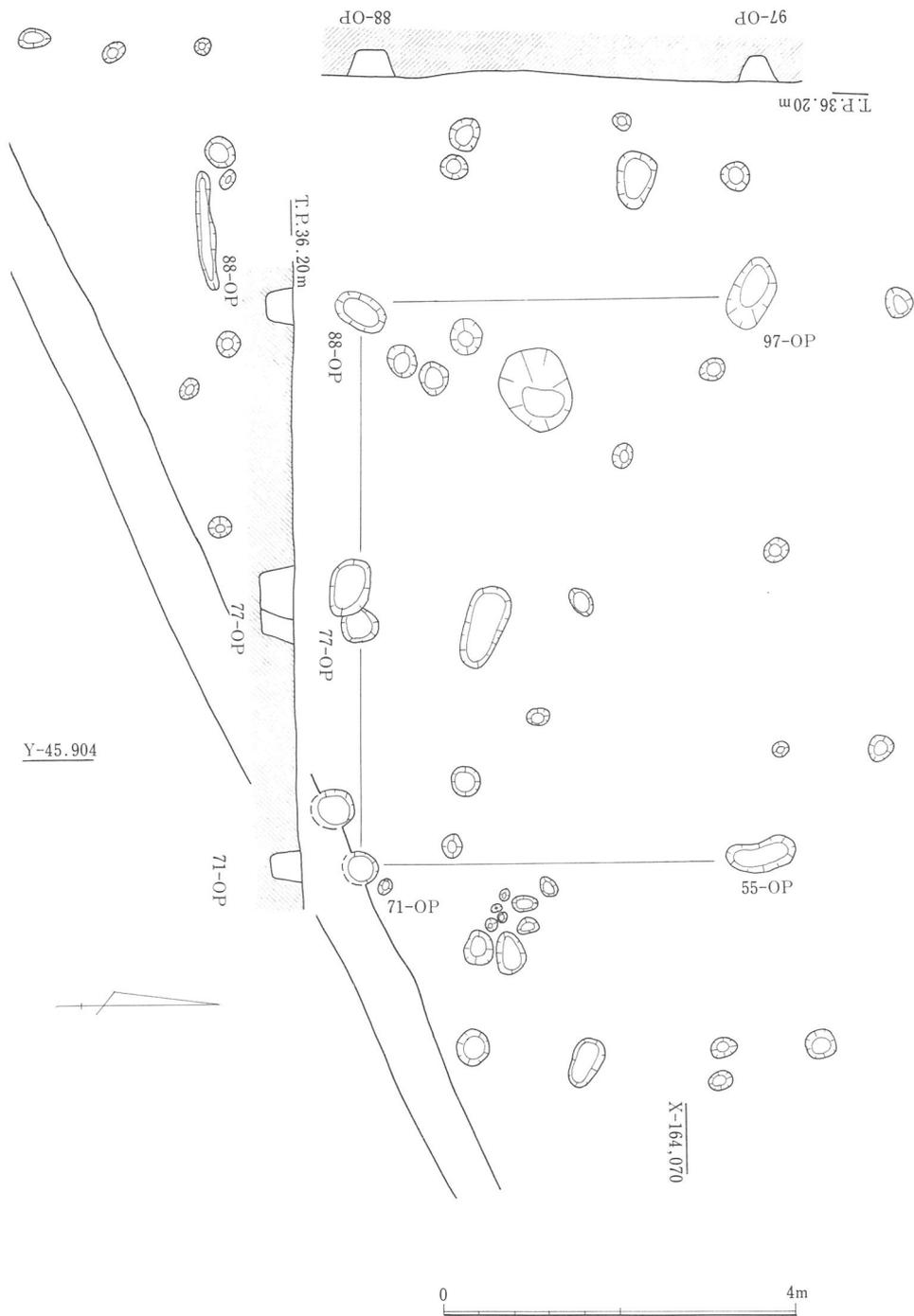
遺物の検出状況は、遺存状況な土器が比較的集中して存在し、その周囲に小片・細片が多数含まれている。破片は離れた部分のものも接合することから、一度に置かれた状態と



第26图 A西-01-O B平面、断面图



第27図 A西-02-OB・764-OF・396-OW・635-OO・718-OO平、断面図



第28图 A西地区 03-OB平面、断面图

は考えられない。接合面も著しく磨滅しているものがあり、再堆積した可能性もある。

完形に近いものが含まれることはすでに記したが、綿密な接合作業の結果では全く完形のもの存在しない。口縁部が欠損したり、高台部分がはずれたりしている。このことが本遺構の性格を考える重要な点であろう。

土器の内容は、瓦器が9割を占め、そのうちでも椀の比率が高くなっている。(宮野)

A西-157-〇〇 (第25図)

調査区端で検出したため、約1/2が側溝によって破壊されている。長径0.75m以上の不整楕円形もしくは不定形のプランを呈し、深度は約15cmを測る。底面からやや浮いた位置に、完形に近い瓦器椀1点を正位置の状態で見出すことができた。意図的に納置したものと考えられる。(宮野)

A西-186-〇〇・187-〇〇 (第25図)

調査区南西部で検出した土壌で、わずかに重複しており、186→187の関係となる。

186-〇〇は、径0.9m×0.8mの不整円形プランで、底面は2段の平坦面となっており、高い面で深度10.5cm、低い面で深度19cmを測る。

187-〇〇は、径0.9m×1.05mの不整円形プランで、深度は8cmを測る。底面は平坦な面をなしている。

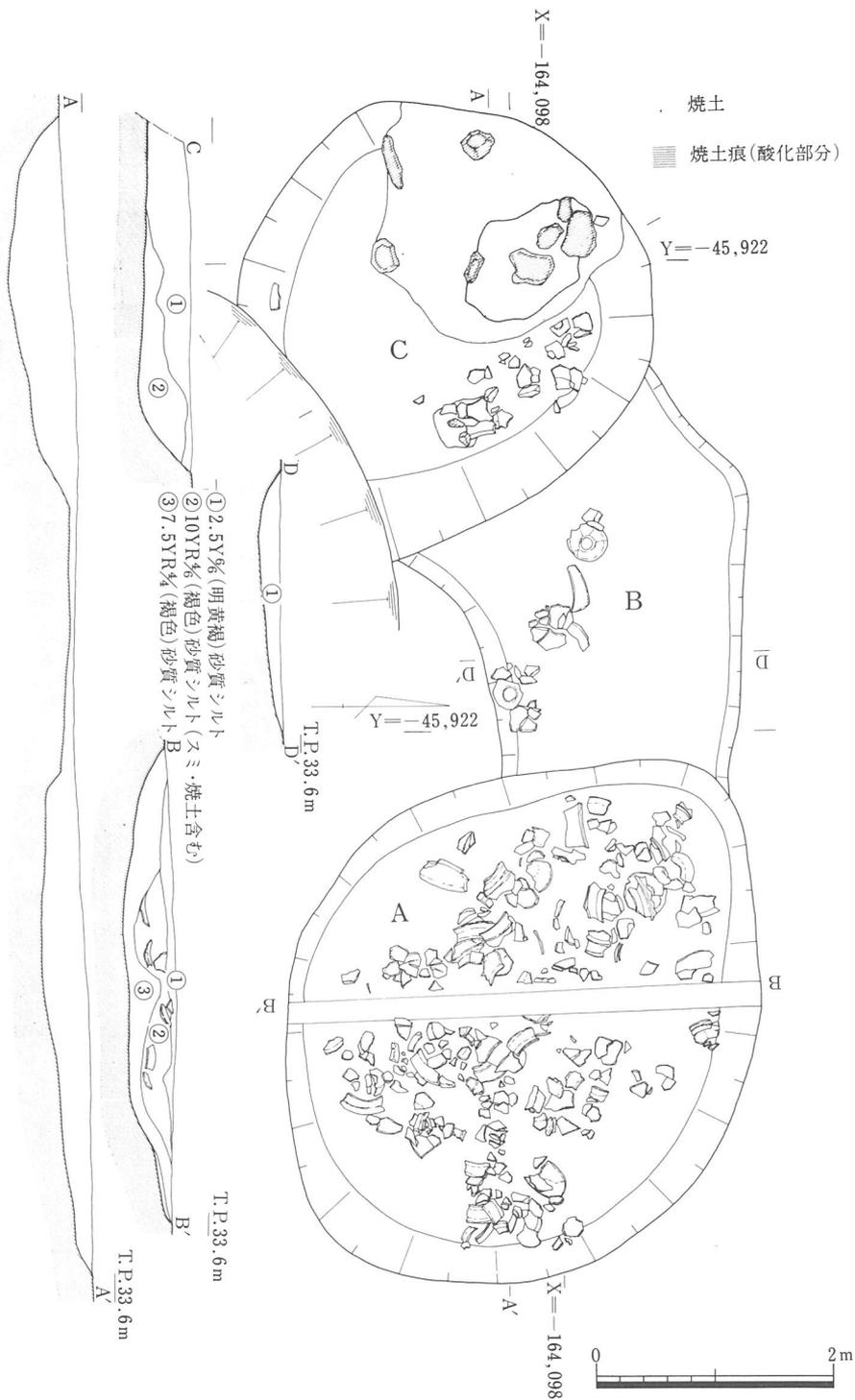
両土壌とも同様の規模を呈し、埋土中にはともに多量の焼土塊がブロック状に混入している。しかし、底面および壁面は全く火熱を受けた痕跡が認められず、本土壌において形成された焼土塊ではない。焼土塊にはスサ入りのものもあり、各塊それぞれの表面が顕著に熱を受けていることから、壁もしくは何らかの構造物が破壊されて熱を受けたものと推定できる。従って、本土壌はそれらを集積した状況と見做すことができる。埋土中には土器片(土師質羽釜が多い)も多く含まれ、熱を受けていないものもあるが、焼土塊と固まっている土器もある。

検出状況と埋土中の状況は以上の如くであるが、土壌そのものは底面が2段や平坦面となっており、本来の機能は別に考えるべきかも知れない。

なお、焼土塊を含む遺構は他にも存在するが、本土壌が最も顕著なものである。(宮野)

A西-377-〇〇 (第29図)

中央部西端、A西-02・03-OBの西側で検出した土坑群である。検出時は、上層埋土が同じであるため、一つの土壌と考えられるが、完掘するにあたって三つの土壌が切りあっていることが判明した。東側よりA・B・Cと呼称する。



第29図 A西地区 377-00平面、断面図

Aは、長径2.5m、短径1.95m、深さ0.2mを測り、平面楕円形を呈する。底面は鍋底状を呈するが、南側の一部は2段に掘られている。埋土は3層に分層でき、下層にはスミや焼土が多量に含まれている。遺物は各層から出土するが、特に中層からは多量の遺物が一括に廃棄された状態で出土した。

Bは、AとCに切られているため形状については不明。深さは最も深いところで9cmと極めて浅く、埋土も一層のみで、A、Bの上層と同じである。

Cは、南東側が上層遺構であるA西-375-OOによって切られている。長径2m、短径1.7mの平面楕円形を呈していたものと思われる。深さは、0.2mを測り、底面は鍋底状を呈する。埋土は2層に分層できるが、下層は焼土塊の固まりで、実際には一層と考えるべきであろう。焼土塊にはスサが含まれており、十分に酸化されずに黒く残っているものもあるが、大半は高熱を受けて赤変したものである。しかし、C土壌自体は熱を受けた痕跡は全く認められない。遺物は廃棄された状態で出土するが、特に東側に集中し、それに反して焼土塊は西側に固まっている傾向が見られる。

これら3土壌から出土する遺物は13世紀前半の土器で、時期差は全く認められず、ほぼ同時期に廃棄されたものと考えられる。また、埋土の状況から3土壌の掘削時期も同時期と考えるべきであろう。なお、出土遺物中の羽釜等は火を受けるなどの使用された痕跡は観察されず、焼土塊やスミが多量に見られることから、本土壌群はB地区で検出された瓦器窯（周辺にあったであろう他の窯も含む）の破壊された窯壁部分や未製品、破損品等の廃棄場と考えるのが最も妥当であろう。（岡本）

A西-417-OO（第25図）

中央部西寄りで検出した平面円形の土壌である。直径0.75m、深さ0.2mを測り、断面逆台形を呈する。埋土は黄褐色の砂質シルトで、瓦器碗・皿と土師器羽釜の小片が出土する。A西-01-OBと重複するが、前後関係は不明。（岡本）

A西-604-OO（第25図）

中央部南寄り、ピット群2の東側で検出した平面不定形の土壌である。長径2m、短径1.6m、深さ0.1mを測り、底面は鍋底状を呈する。埋土はスミを含んだ褐色のシルトで、瓦器（碗・皿）と土師器（皿・羽釜）の小片が出土する。（岡本）

A西-635-OO（第27図）

中央部で検出した平面楕円形の土壌である。長径1.4m、短径0.8m、深さ0.35mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は3層に分層でき、遺物は出土しない。（岡本）

A西-666-〇〇 (第25図)

中央部東寄り、ピット群1の南東側で検出した平面楕円形の土壌である。長径0.7m、短径0.5m、深さ0.2mを測り、断面U字形を呈する。埋土は黄褐色の砂質シルトで、遺物は出土しない。(岡本)

A西-703-〇〇 (第25図)

中央部東寄りで検出した平面楕円形の土壌である。長径0.6m、深さ0.1mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は黄褐色の粘質シルトで、遺物は出土しない。(岡本)

A西-709-〇〇 (第25図)

中央部東端で検出した平面円形の土壌である。直径0.7m、深さ0.2mを測り、断面U字形を呈する。埋土は黄褐色の砂質シルトで、遺物は出土しない。(岡本)

A西-718-〇〇 (第27図)

中央部北寄りで検出した平面楕円形の土壌である。長径0.85m、短径0.75m、深さ0.2mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は2層に分層でき、遺物は出土しない。(岡本)

C. 溝

A西-33-〇S (第25図)

調査区北西端に一部検出した溝である。幅0.3m~0.35m、深度7cm~10cmを測る。埋土中には瓦器碗の破片や土師器片が、底面からやや浮いた位置に、まとまりをもって検出された。

第2層直下の地山面検出のため、上半は削平されているものと考えられる。従って本来の規模を推定することはできないが、周辺に遺構がほとんど存在しないことから、屋敷地の何らかの区画に関する溝とも考えられる。(宮野)

A西-177-〇S (第25図)

調査区を南南西-北東の方向に横切る溝である。西側の肩は、02-〇Zの溝や現代の水路と重複するため明らかでない部分が多い。推定幅1.5m~1.6m、平均深度30cmである。後世の溝や水路と方向が一致することからみると、何らかの水路に使用されていたことも考えられるが、埋土の状況からでは判断できない。調査区南半の状況を見ると、本溝を境にして東側はピットや土壌など遺構が多数存在するのに対し、西側は02-〇Zによるある程度の削平を考慮しても、本時期の遺構はほとんどなく、明確な差異が認められる。従って、建物群もしくは屋敷内の区画を示すものとも考えられる。溝の断面形は浅いU字形である。

遺物については、前述のように遺構の重複が多く、それらの厳密な切合い状況が判然としないため、A西-177-O Sとして取りあげた中でも鎌倉時代から江戸時代のものを含んでいる。いずれも細片で、図化できるものはない。

遺物からでは本遺構の時期を特定することはできないが、周囲の状況からみて、鎌倉時代に開削され近世、そして一部は現代まで連綿と掘り返されたものと判断できよう。

(宮野)

A西-263-O S (第25図)

A西-177-O Sとほぼ直交する溝で、A西-177-O Sとの関係は不明であり、判断する根拠もない。しかし、検出状況や埋土の類似からすると一連のものと考えてもよいだろう。

規模は中央付近での最大幅1.55m、最大深度13cmを測り、幅に比して浅い溝である。

(宮野)

A西-324-O S (第25図)

A西-263-O Sと同様、A西-177-O Sと接する溝である。A西-177-O Sと直交するが、3.5mほど伸びて北東に直角に曲がり、A西-177-O Sと平行する。直交して東西にのびる部分は細く、平均幅0.22mを測り、平行する部分は平均幅0.76mとなっている。深度は25.5cm。

遺物は少量であるが、同一個体と考えられる土師質羽釜細片を多量に含んでいる。だが復元するには至らない。

(宮野)

A西-710・713・714-O S (第25図)

中央部東寄りで検出したNNE-S SW方向の溝である。上面が削平されているため別個の溝のように検出されたが、本来は連続した一条の溝であったと考えられる。幅0.5m深さ0.1mを測り、断面U字形を呈する。埋土は褐色の砂質シルトで、遺物は出土しない。A西-177・747-O Sとほぼ平行に走る。

(岡本)

A西-747-O S (第25図)

中央部東寄り、A西-710・713・714-O SとA西-177-O Sとの間で検出したNNE-S SW方向の溝である。北側は調査区外に延び、南側は削平されているためか袋状に終わる。総延長約9mを検出した。幅0.5m、深さ0.1mを測り、断面U字形を呈する。埋土は褐色の砂質シルトで、遺物は出土しない。A西-177・710・713・714-O Sとほぼ平行して走る。

(岡本)

d. 井戸

A西-396-O W (第25図)

中央部南寄り、A西-03-O BとA西-764-O Fの間で検出した素掘りの井戸である。0.85m×0.78mの平面楕円形を呈する。深さは0.75mを測り、底部は平坦である。埋土は5層に分層でき、13世紀前半の瓦器(椀・皿)・土師器(皿・羽釜)片が少量出土する。A西-02・03-O Bと同時期と考えられることから、これら建物に伴う井戸であろう。

(岡本)

2. B地区

B地区は本遺跡調査区内で最も調査面積が大きく、鎌倉時代の遺構も集中して検出された。掘立柱建物や土壌、溝などで、中世集落の内容が明確に把握できる資料である。

a. 掘立柱建物、ピット群

B-3-O B (第28図)

B地区北東で検出した掘立柱建物である。B-160・168・176・211・214・221・234・239・247-O Pによって構成される3間×2間の建物である。方位はN-103°-Wである。寸法は東西6.8m、南北3.9mを測る。柱穴間隔は1.7~2.0m、柱穴は直径30~40cmの円形もしくは楕円形で、深さ16~29cm測る。柱穴内埋土は明黄褐色粘質土である。B-3-O Bの周囲には直径15~20cm、深さ15~20cm程度のピットが多数あり、庇であると考えられる。出土遺物はB-160・168・214・221・234・239・247-O Pから瓦器椀、土師器皿、羽釜が出土し、B-3-O B周囲のピットからも同様な遺物の小破片が出土した。

B-4-O B (第31図)

B地区北東で検出した掘立柱建物が推定できる遺構である。B-3-O Bとは約1.5mの間隔をあげ、北西に位置する。北側は調査区外に及んでおり全容は明らかではない。B-298・294・295・263・264・297・261・260・259・672-O Pによって構成される。南側柱4間、東側柱2間、西側柱1間を確認した。南側柱穴間是不規則で1~1.5m、東側柱穴間、西側柱穴間は2mを各々測る。柱穴は直径15~25cm、深さ8~12cm、柱穴内埋土は黄褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

B-5-O B (第31図)

B地区北東で検出した掘立柱建物が推定できる遺構である。B-3-O Bとは約3mの間隔をあげ、南西に位置する。B-273・282・288・284・281・655・651-O Pによって構成され、2間×3間の建物が推定できる。方位はN-17°-Wである。寸法は南北5.7m、